

かに

KANI



公益財団法人 がん研究振興財団

第53号 2026

表紙のことば

癌と云う病気の概念がはっきりしたのは、19世紀中葉以後の事であるが、癌と云う言葉自体は、東西ともに可成古くから行われている。英仏語の Cancerは、ラテン語のまま、蟹の意味を兼ねている。そして、このラテン語はまたギリシャ語のカルキノスから来ている。2,400年前のギリシャのヒポクラテスは、すでに病気としてのカルキノスの特徴を書き記したと云う。西紀200年に死んだローマの医師ガレノスは、カンケルを「時に潰瘍を伴う悪性の極めて硬い腫瘍」と定義した。蟹の字をこう云う病気の名にしたのは、昔から珍しくない乳癌の恰好が、蟹を連想させたからであろう。赤黒い、凹凸のある、醜いその外観は、まさに蟹の甲羅そのものだが、腋の下のリンパ腺まで病気が拡がり、しかも、その間を繋ぐ、リンパ管までおかされた、乳癌の末期の姿は、蟹の鉗やその足の節々をさえ、連想させる。

一方癌の字は、中野操氏の考証によれば、南宋の医書にすでに用いられているそうだ。病だれの中の品山は岩石の意味で、やはり皮膚癌や乳癌の外観からの表徴文字と察せられるが、この字は癌の組織の持つ大きな他の特徴——他の組織と比較にならぬ程、堅い性質——まで表示し得て、妙である。

表紙の絵は「がざみ」と呼ばれる「わたりがに」の一種で、太平洋の日本近海に普通の、食用蟹の一つである。海底の砂に巧みにもぐり込み、しかも、海を渡って遠くにまで行く。癌の持つ周囲組織へのもぐりこみ（浸潤）や、方々への飛び火（転移）は、この蟹の性癖で巧みに表現されている。

題字の達筆は藤井理事長の揮毫である。編集部苦心の作と察せられるこの加仁は、草書では「かに」となる。仁術に加えるもう一つのもの——一般人の理解と協力——なくしては、癌撲滅の大目的は達成し得られない事を、言外にうたっているものと云えようか。蟹の周囲のあみ目の一つ一つは癌の細胞である。

(久留 勝・くる まさる；国立がんセンター第3代総長)

公益財団法人がん研究振興財団の概要

沿革

- 昭和40年12月 「がん研究振興会」として発足
- 昭和43年 9月 厚生省より「財団法人がん研究振興会」として認可
- 昭和59年 3月 寄付行為改正により「財団法人がん研究振興財団」に名称変更
- 平成24年 4月 内閣総理大臣より「公益財団法人がん研究振興財団」として認可
(公益認定)

設立の経緯

遡ること約半世紀前の「がん」の状況は、社会においても家庭においてもかけがえのない立場にある年齢層の人達の健康にとって最大の脅威となっており、医学の進歩をもってしてもなお、未知の分野を多く残していました。

国のがん対策は、昭和37年我が国初のがん専門病院として国立がんセンターが開設され、専門的な研究、診断、治療が行われました。

当財団の設立に当っては、「がん」について医学的にも未知の分野が広く、研究すべきことが山積した状況の中で、官民一体となり、国費のほか一般の方々からの浄財を以てがんの治療、予防技術の開発事業を行うため、昭和40年12月「がん研究振興会」として発足し、その後昭和43年9月、初代会長に経済団体連合会会長であった石坂泰三氏、副会長に富士銀行頭取の岩佐凱實氏、理事長に八幡製鉄副社長藤井丙午氏、常務理事に経済団体連合会専務理事花村仁八郎氏による経済界を挙げての組織体制により厚生省から財団法人として認可設立されました。

昭和59年度からは、国による「対がん10か年戦略」に伴う事業を実施するため、昭和59年3月名称を「財団法人がん研究振興財団」と改め、推進事業を30年に亘り実施して参りました。また、平成24年4月に内閣総理大臣から全事業を公益事業とする公益認定を受けております。

事業内容

- (1) がん研究に関する研究の助成
- (2) がん研究に関する国際協力及び国際交流
- (3) がん研究に関する若手研究者の育成
- (4) がん研究に関する国民への情報発信
- (5) がん研究に関する国内外諸団体との連携及び協力
- (6) その他本財団の目的を達成するために必要な事業

巻頭言

データと共創で拓くがん対策

国立がん研究センター がん対策研究所長 松 岡 豊 4

TOPICS

厚生労働省による「全国がん登録生存率（2016年、2018年）」の公表について 6

特集1 令和7年度がん研究シンポジウム

「ゲノム情報が生み出す新しいがんの予防と医療」開催のご報告

国立がん研究センター

がんゲノム情報管理センター（C-CAT）センター長 河 野 隆 志 11

特集2 令和7年度がんサバイバーシップ研究成果発表会開催報告

学校法人 埼玉医科大学 医学部社会医学 客員教授 亀 井 美登里 16

特集3 令和7年度がんサバイバーシップ研究セミナー開催報告

～がんサバイバーが地域で活用できる社会資源～

学校法人 東京医療保健大学大学院 教授 竹 内 朋 子

学校法人 京都薬科大学 常任理事 田 中 徳 雄 19

令和7年度事業実績

がん情報提供支援事業運営委員会報告 上 田 龍 三 24

がん研究助成委員会Ⅰ報告 村 上 善 則 27

がん研究助成委員会Ⅱ報告 亀 井 美登里 33

海外派遣研究助成委員会報告 菅 野 純 夫 36

事業実績2000～2025 41

令和8年度事業計画 51

ご寄付芳名録 54

役員・評議員・顧問名簿 55

あとがき 56

データと共創で拓くがん対策



国立がん研究センター
がん対策研究所長 松岡 豊

巻頭言の機会をいただき、心より感謝申し上げます。第4期がん対策推進基本計画のもと、私たちはいま、がん医療と社会の接点が大きく組み替わる局面に立っています。ゲノム医療のような革新的医療技術の進歩だけでなく、人口高齢化と生産年齢人口の減少、格差拡大や経済的不安の増大、医療DXの推進、日常生活での生成AI利用、健康・医療データ等の扱い方までが変わる時代に、がん対策・がん研究は、これまで以上に人と社会を中心に据えた事業設計を心がける必要があります。

第4期計画は、科学的根拠に基づく予防・検診から、患者本位で持続可能な医療の提供、がんとともに尊厳を持って安心して暮らせる社会構築に至るまで切れ目のない支援を掲げ、格差の縮小とエビデンスに基づく政策運営を重視しています。現場では、患者と家族の生活の中で、より良い選択を支える仕組みづくりが問われています。2040年の人口構成や想定される医療需要の変化を踏まえ、国民が引き続き適切ながん医療を受けることができるよう持続可能な医療提供体制を再構築していくことが求められてい

ます。その実現に向けて鍵となるのが、データに基づいてがん医療提供体制の「均てん化」と「集約化」の議論を進めることです。病院毎の役割分担とネットワーク化、診療実績の見える化、医療へのアクセスを含めた患者支援、リモート技術の活用を通じて、患者のアウトカムと体験価値を同時に高める道筋を描く必要があります。

基盤整備では、医療法等の一部改正の流れのもと、がん登録データについてもNDB・DPC・介護等ビッグデータと連結し、生活者の軌跡に沿って解析可能な環境が整いつつあります。リアルワールドデータ利活用により、実臨床の問いに迅速に答え、政策や診療の改善に結びつけることができる日が近づいています。一方で、個人情報保護と公益性を両立するガバナンス、データサイエンス領域の人材育成、データ標準化と品質管理は不可欠です。

がん対策研究の価値も、論文発表という中間成果だけで測る時代ではなくなっています。公衆衛生、医療サービス、医療制度にどのような変化をもたらしたか、患者・市民の認知や行動、

格差の縮小にどれだけ寄与したか、といった社会的インパクトを明確なゴールとして据えることが期待されます。達成したい社会価値からバックキャストで研究を設計し、実装科学の視点を入れ、納得できるアウトカム設定、そして患者・市民参画を前提にした研究実施と運営が、研究と社会を橋渡しすると信じています。

情報提供・相談支援の在り方も転換点にあります。正確さだけでは届けたい人に届きません。情報を受け取る個別性に配慮し、共創を通じてニーズを発見し、対話と伴走でがん予防・医療・共生における意思決定を支え、誰もがアクセスできる形で提供する、そのための挑戦が求められます。誰にでも理解できる言葉づかい、多言語対応、アクセシビリティの確保、デジタルと対面を組み合わせたハイブリッド支援は、信頼を築くための基本装備です。

このような変化を担うのは人です。自らが得意とする領域から越境し、学際的な学びや経験の機会を持ち、科学的エビデンスの創出とエビデンスの社会実装・マネジメントを横断できる人材の育成が急務です。私自身、精神科医としての修練を受けたのち、財団のリサーチ・レジデントとして三年間お世話になり、臨床研究・疫学研究のABCと研究を社会に還元する視点を学びました。初めての越境経験を機に、研究医、臨床研究支援者、医系技官と自分のOSアップデートを繰り返し、がん対策にたどり着いています。「誰一人取り残さないがん対策」を実現するために、行政・医療者・研究者・患者市民・産業・地域の皆さまの声を聞きながら、がん研

究に取り組む若手が参入して来られることを期待します。

厚生労働省による 「全国がん登録生存率（2016年、2018年）」 の公表について

令和8年1月14日に「2016年全国がん登録生存率報告」が、2月13日に「2018年全国がん登録5年生存率報告」が、厚生労働省から公表されました。ポイントは、以下のとおりです。

1. 「2016年全国がん登録生存率報告」 の結果について 【令和8年1月14日公表資料より】

このたび、2016年に新たにがんと診断された方の5年生存率の結果を取りまとめましたので公表します。

全国がん登録は、がん登録等の推進に関する法律（平成25年法律第111号）に基づき、がん対策全般を科学的知見に基づき実施する上で基礎となるものとして、全ての病院及び都道府県に指定された診療所から、2016年以降にがんと診断された方の罹患や治療の情報及び予後情報を登録・管理し、がん対策等に資する研究に利用されています。

5年生存率は、2016年以降にがんと診断された方について、5年間生存した方の割合を算出するもので、毎年、国立研究開発法人国立がん研究センターにより集計し、厚生労働省において取りまとめているものです。

結果のポイント

■ 15歳以上の5年生存率

2016年に新たにがんと診断されたAYA・成人（15歳以上）の全国の5年生存率は、前立腺で92.1%、乳房で88.0%、子宮頸部で71.8%、大腸（直腸・結腸）で67.8%、胃で64.0%、肺で37.7%、肝および肝内胆管で33.4%、膵臓で11.8%であった。

■ 小児（15歳未満）の5年生存率

2016年に新たにがんと診断された小児（15歳未満）の全国の5年生存率は、リンパ腫・リンパ網内系腫瘍で95.7%、胚細胞性腫瘍・絨毛性腫瘍・性腺腫瘍で90.2%、白血病・リンパ増殖性疾患・骨髄異形成疾患で82.2%、神経芽腫・その他類縁疾患で78.5%、中枢神経系・その他頭蓋内・脊髄腫瘍で60.8%であった。

※詳細資料（PDF）厚生労働省HP：https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_68515.html

2. 「2018年全国がん登録5年生存率報告」 の結果について 【令和8年1月14日公表資料より】

結果のポイント

■ 15歳以上の5年生存率

2018年に新たにがんと診断されたAYA・成

人（15歳以上）の全国の5年生存率は、前立腺で92.5%、乳房（女性）で88.4%、子宮頸部で71.4%、大腸（結腸・直腸）で68.0%、胃で64.4%、肺で39.6%、肝および肝内胆管で34.4%、膵臓で13.5%であった。

概ね横ばいで推移している中、膵臓、多発性骨髄腫、肺においては2016年と比較して上昇した（※）。

■ 15歳未満の5年生存率

2018年に新たにがんと診断された小児（15歳未満）の全国の5年生存率は、リンパ腫・リンパ網内系腫瘍で96.6%、胚細胞性腫瘍・絨毛性腫瘍・性腺腫瘍で95.5%、白血病・リンパ増殖性疾患・骨髄異形成疾患で84.3%、神経芽腫・その他類縁疾患で74.9%、中枢神経系・その他頭蓋内・脊髄腫瘍で65.2%であった。

概ね横ばいで推移している中、中枢神経系・その他頭蓋内・脊髄腫瘍、肝腫瘍、軟部組織腫瘍・その他の骨外性肉腫、胚細胞性腫瘍・絨毛性腫瘍・性腺腫瘍においては2016年と比較して上昇した（※）。

（※）2016年の5年生存率を100%としたとき、2018年の生存率が±5%以上変化したものを上昇又は低下とした。なお、15歳以上・15歳未満いずれも、低下に該当する部位はなかった。

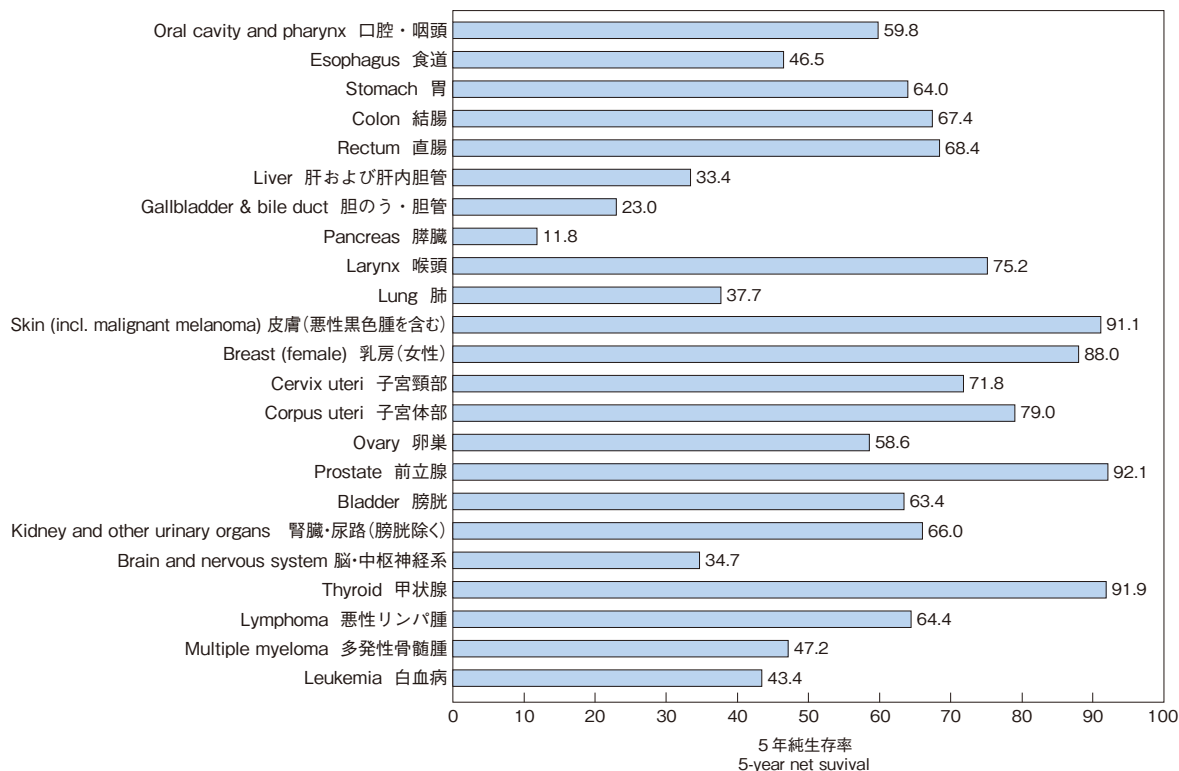
※詳細資料（PDF）厚生労働省HP：https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_70382.html

【参考資料1】 全国がん登録における5年純生存率（2016年診断例）

（がん研究振興財団「がんの統計2026」より）

全国がん登録における5年純生存率（2016年診断例）
5-year Net Survival Rate, Data from National Cancer Registry
(Diagnosed in 2016)

(1) 5年純生存率 男女計 15歳～99歳（5-year Net Survival, Both Sexes, 15-99 years old）



◆ 全国がん登録における2016年診断例のAYA・成人の純生存率が
高い部位：喉頭、皮膚、乳房(女性)、子宮頸部、子宮体部、前立腺、甲状腺
低い部位：肝および肝内胆管・胆のう・胆管、膵臓、肺、脳・中枢神経系

◆ 5-year net survival rates among AYA and adults diagnosed in 2016 in the National Cancer Registry were
high for : larynx, skin, breast (female), cervix uteri, corpus uteri, prostate and thyroid
low for : liver, gallbladder and bile ducts, pancreas, lung, and brain and nervous system

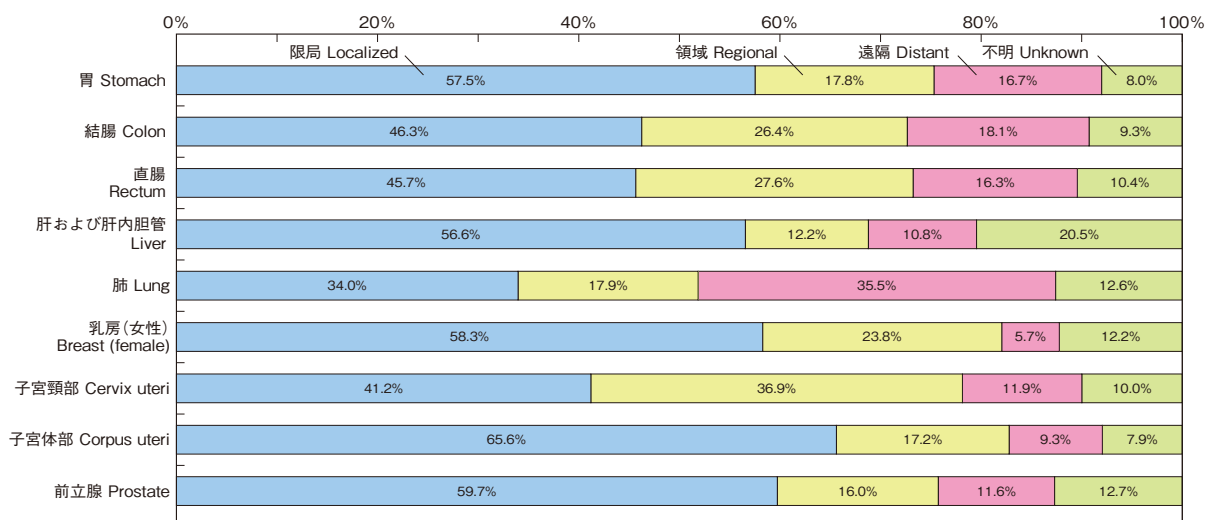
(1) 男女計 5年純生存率

全国がん登録において、2016年に診断されたAYA・成人の患者の5年純生存率を見ると、胃で64.0%、結腸で67.4%、直腸で68.4%、肝および肝内胆管で33.4%、肺で37.7%、女性乳房で88.0%、子宮頸部で71.8%、子宮体部で79.0%、前立腺で92.1%であった。皮膚、乳房、前立腺、甲状腺では、85%以上と生存率が高く、肝および肝内胆管、胆のう・胆管、膵臓、肺、脳・中枢神経系では40%未満と生存率が低かった。

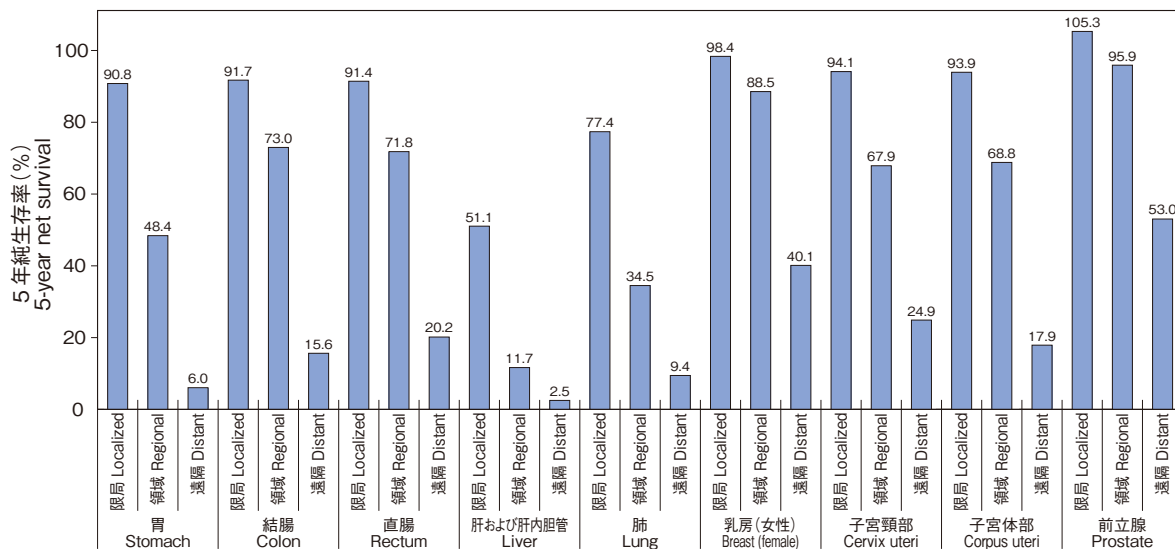
(1) 5-year Net survival, both Sexes

In the National Cancer Registry, the 5-year net survival for AYA and adults diagnosed in 2016 was 64.0% for stomach, 67.4% for colon, 68.4% for rectum, 33.4% for liver and intrahepatic bile ducts, 37.7% for lung, 88.0% for female breast, 71.8% for cervix uteri, 79.0% for corpus uteri, and 92.1% for prostate. Net survival is high (> 85%) for skin, breast, prostate, and thyroid, and low (< 40%) for liver, gallbladder and bile ducts, pancreas, lung, and brain and nervous system.

(2) 臨床進行度分布 男女計 15歳～99歳 Distribution of Clinical Stages (Both Sexes, 15-99 years old)



(3) 臨床進行度別5年純生存率 男女計 15歳～99歳
5-year Net Survival Rate by Clinical Stages (Both Sexes, 15-99 years old)



(2) 臨床進行度分布 (主要部位)

全国がん登録において2016年に診断された患者の診断時の臨床進行度分布をみると、がんが原発臓器・組織に「限局」しているものの割合は、胃、結腸、直腸、肝および肝内胆管、乳房、子宮頸部、前立腺の各がんでは41～60%で、子宮体部では66%と比較的高く、肺では34%と低い。

(3) 臨床進行度別5年純生存率

臨床進行度別の5年純生存率をみると、「限局」の生存率は、胃、結腸、直腸、乳房、子宮頸部、子宮体部、前立腺では90%以上に分布し良好だが、肺では77%、肝および肝内胆管では51%と比較的不良である。領域リンパ節に転移があるか隣接臓器・組織に浸潤している「領域」の生存率は、乳房、前立腺で85%以上、結腸、直腸、子宮体部、子宮頸部では67～73%に分布し、胃では48%であった。肝および肝内胆管では12%、肺では35%と不良である。さらに進展した「遠隔」の生存率は、乳房および前立腺を除けばいずれも25%未満と極めて不良である。

(2) Distribution of clinical stage (major sites)

According to data from the National Cancer Registry for patients diagnosed in 2016, cancers classified as “localized” accounted for 41–60% for stomach, colon, rectum, liver, breast, cervix uteri, and prostate, 66% for corpus uteri, and 34% for lung.

(3) 5-year net survival rate, by clinical stage

The 5-year net survival rates for “localized” cancer were high (> 90%) for stomach, colon, rectum, breast, cervix uteri, corpus uteri, and prostate, whereas they were relatively lower at 77% for lung and 51% for liver.

The survival rates of “regional” cancers with metastases to regional lymph nodes or infiltration exceeded 85% for breast and prostate, ranged from 67% to 73% for colon, rectum, cervix uteri, and corpus uteri, were 48% for stomach, and were relatively low for lung (35%) and liver (12%). The survival rates of “distant” cancers were lower than 25% for all sites except breast and prostate.

【参考資料2】 がん登録等の推進に関する法律の概要（厚生労働省HPより）

がん登録等の推進に関する法律の概要

がん登録等（全国がん登録・院内がん登録等の方法によるがん診療情報の収集）

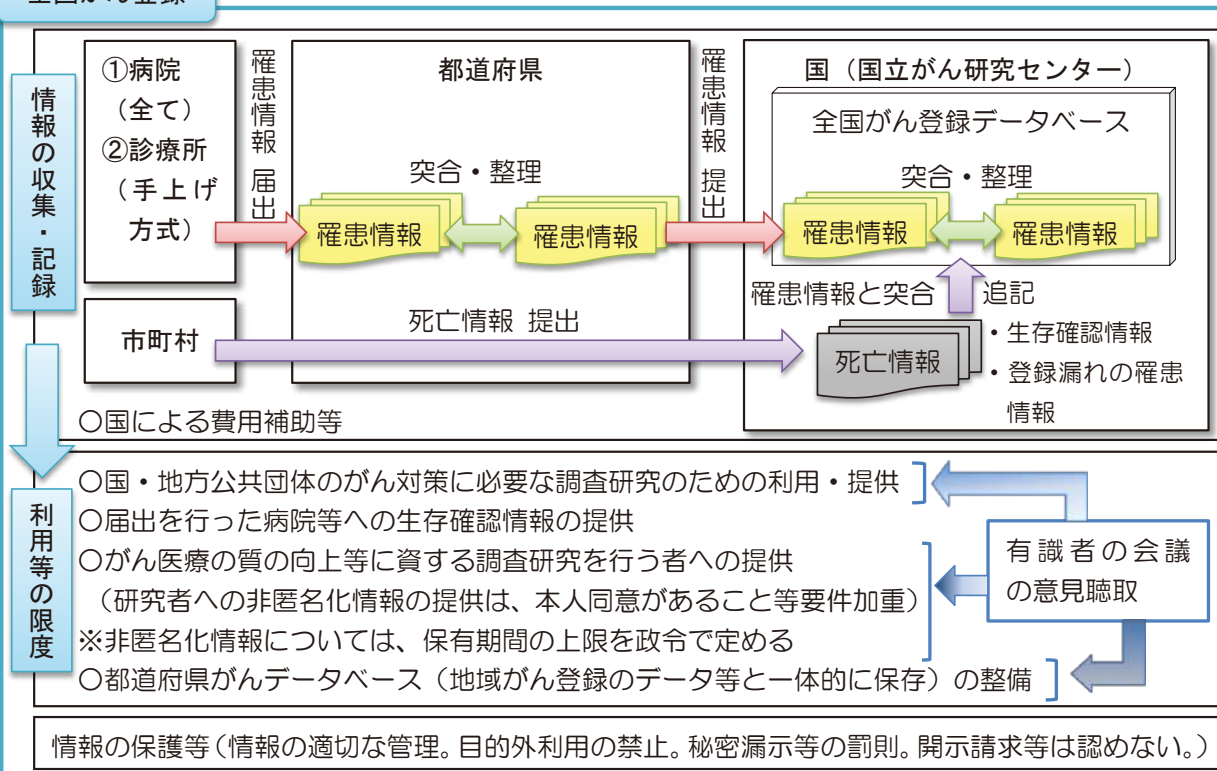
- 「全国がん登録」：国・都道府県による利用・提供の用に供するため、国が国内におけるがんの罹患、診療、転帰等に関する情報をデータベースに記録し、保存すること
- 「院内がん登録」：病院において、がん医療の状況を適確に把握するため、がんの罹患、診療、転帰等に関する詳細な情報を記録し、保存すること

➡がん医療の質の向上等（がん医療・がん検診の質の向上とがん予防の推進）、国民に対するがん・がん医療等・がん予防についての情報提供の充実その他のがん対策を科学的知見に基づき実施

基本理念

- 全国がん登録では、広範な情報収集により、罹患、診療、転帰等の状況をできる限り正確に把握
- 院内がん登録について、全国がん登録を通じて必要な情報を確実に得させ、その普及・充実に努める
- がん対策の充実のため、全国がん登録のほか、がんの診療に関する詳細な情報の収集を図る
- がん登録等の情報について、民間を含めがんに係る調査研究に活用、その成果を国民に還元
- がん登録等に係る個人に関する情報を厳格に保護

全国がん登録



院内がん登録等の推進（院内がん登録の推進、国によるがん診療情報の収集等のための体制整備）

人材の育成（全国がん登録・院内がん登録の事務に従事する人材の確保等のための必要な研修等）

がん登録等の情報の活用

- 国・都道府県等⇒がん対策の充実、医療機関への情報提供、統計等の公表、患者等への相談支援
- 医療機関⇒患者等に対する適切な情報提供、がん医療の分析・評価等、がん医療の質の向上
- がん登録等の情報の提供を受けた研究者⇒がん医療の質の向上等に貢献

令和7年度がん研究シンポジウム 「ゲノム情報が生み出す 新しいがんの予防と医療」 開催のご報告



国立がん研究センター
がんゲノム情報管理センター (C-CAT)
センター長 河野 隆志

さる令和8年3月19日(木)に、国立がん研究センター新研究棟・大会議室にて令和7年度がん研究シンポジウムを開催いたしました。テーマは「ゲノム情報が生み出す新しいがんの予防と医療」とし、予防と治療の二つの領域において、近年一流誌に論文を発表された「新世代リーダー」8名にご登壇いただきました。最先端科学に関するご講演を通じて、がんの予防・治療の未来について活発な議論が行われました。

本シンポジウムは、演者および研究題目への注目度が高く、例年にも増して400名を超える事前登録がありました。登録者の過半数が企業関係者であり、今後の医療実装に向けた期待の高まりを強く感じさせるシンポジウムとなりました。なお、本シンポジウムの開催にあたっては、厚生労働省の後援をいただきました。

講演1

理化学研究所生命医科学研究センター
碓井 喜明 先生
「ゲノム疫学的視点からみた
疾患リスクの構造」

一番目の演者は、理化学研究所生命医科学研究センターの碓井喜明先生で、「ゲノム疫学的視点からみた疾患リスクの構造」についてご講演いただきました。疫学における「集団を俯瞰する視点」とゲノム情報を統合し、疾患リスクの構造をどのように解明できるかを論じる内容でした。特に、遺伝的素因を示す生殖細胞系列バリエーションと、近年注目が高まっている加齢や環境の影響下で生じる体細胞変異である「クローン性造血」に着目し、これらが環境要因と相互作用しながら発症・進展・死亡リスクを規定することが示されました。碓井



先生らは、十万人規模の末梢血ゲノム解析を通じて、遺伝環境相互作用、さらに生殖細胞系列バリエーション・環境要因・体細胞変異が重層的に関与する複雑な相互作用を同定されています。これらの知見は、高リスク集団の同定や個別化予防戦略の構築につながるものであり、がん予防研究の新たな基盤となることが期待されます。

講演2

国立がん研究センター 研究所総合がん研究分野
鵜飼 知嵩 先生

「統合がん研究が切り拓くがん予防研究」



二番目の演者は、国立がん研究センター研究所総合がん研究分野の鵜飼知嵩先生で、「統合がん研究が切り拓くがん予防研究」について、米国ボストンからの中継によりご

講演いただきました。ビッグデータとマルチオミックス解析を統合した新しいがん予防研究についての内容でした。がんは分子異常、腫瘍免疫、腸内細菌叢などが複雑に関与する異質性の高い疾患であり、従来の疫学研究のみでは発がん機序を十分に捉えることは困難です。鵜飼先生は、日米30万人超の大規模コホートと2,000例を超えるがん症例のオミックス情報を統合することで、特に増加が問題となっている若年発症がんの実態解明を進めておられます。生活習慣の欧米化、肥満、運動不足などの長期的影響の解析に加え、腸内細菌叢や腫瘍免疫に関する新規データも組み合わせることで、個別化された予防・治療への応用が期待される知見が示されました。

講演3

京都大学白眉センター
垣内 伸之 先生

「体細胞モザイクとクローン進化」

三番目の演者は、京都大学白眉センターの垣内伸之先生で、「体細胞モザイクとクローン進化」についてご講演いただきました。垣内先生は、正常組織においても細胞分裂



に伴い遺伝子変異が蓄積し、個体内に遺伝的に異なる細胞集団が共存する「体細胞モザイク」に焦点を当てておられます。近年、正常に見える組織であっても、がんのドライバー変異を獲得した細胞が選択され、クローンとして拡大していることが明らかとなってきています。こうした後天的な組織再構築は、加齢や環境因子、さらにはアジア人に特徴的な遺伝要因とも密接に関係し、がんリスクを考える上で重要な新しい視点です。ご講演では、この体細胞モザイクを単なる現象として捉えるのではなく、疾患リスクモデルに基づく早期発見、さらには予防・介入につなげる臨床応用の可能性が示されました。個体内の細胞進化を踏まえた新たな病理理解の枠組みを提示する、非常に示唆に富む内容でした。

講演4

東京大学医学部附属病院、Francis Crick 研究所
唐崎 隆弘 先生

「超高感度 ctDNA アッセイを用いたがん再発リスクの層別化」

四番目の演者は、東京大学医学部附属病院、Francis Crick 研究所の唐崎隆弘先生で、「超高



感度 ctDNA アッセイを用いたがん再発リスクの層別化」についてご講演いただきました。肺がん術後再発の高精度予測を目指し、循環腫瘍 DNA (ctDNA) を用いた超高感

度リキッドバイオプシーの有用性を検証した研究のご紹介でした。従来のアッセイでは、術後に残存するごく微量の腫瘍を捉える感度が不十分でしたが、本研究では 1～3 ppm という高感度の次世代アッセイを用いて非小細胞肺がんを解析しています。その結果、従来は検出困難であった極微量の ctDNA であっても、再発リスクや予後不良と強く関連することが示されました。また、術後 ctDNA 量の多寡や推移は、再発時期や遠隔転移・局所再発といった再発様式とも密接に関係していました。治療強化と縮小の双方を見据えた個別化医療への実装が期待される講演でした。

講演5

国立がん研究センター 研究所分子腫瘍学分野
斎藤 優樹 先生

「本邦がん遺伝子パネル検査データを用いたリアルワールド・エビデンスの創出」

五番目の演者は、国立がん研究センター研究所分子腫瘍学分野の斎藤優樹先生で、「本邦がん遺伝子パネル検査データを用いたリアルワールド・エビデンスの創出」についてご講演いただきました。日本で保険診療として実施されたがん遺伝子パネル検査の大規模



リアルワールドデータ (C-CAT データ) を解析し、その実臨床上の有用性を明らかにした研究です。対象は進行・再発固形がん 54,185 例、81 がん種に及び、治療標的となる遺伝子異常の検出率、検査結果に基づく予後層別化、標的治療導入率などが詳細に検討されました。その結果、検査で見つかった遺伝子異常のうち、治療薬との対応関係が明確で、実際の治療に結びつきやすい異常を有する患者ほど、予後が比較的良好であることが示されました。すなわち、がん遺伝子パネル検査は、適切な治療選択に資するだけでなく、予後の見通しを立てる上でも有用であることが明らかになったものです。一方で、臨床的に意義のある異常が見つかって、実際に新規標的治療に結びつく割合は依然として限定的であり、がん種間格差も大きいことが明らかとなりました。がんゲノム医療の現状と今後の課題を具体的に示す講演内容でした。

講演6

国立がん研究センター 研究所ゲノム生物学研究分野
中奥 敬史 先生

「RNA修飾の異常とがん個別化医療への展開」

六番目の演者は、国立がん研究センター研究所ゲノム生物学研究分野の中奥敬史先生で、「RNA修飾の異常とがん個別化医療への展開」についてご講演いただきました。



DNA 変異解析だけでは捉えきれないがんの分子病態として、RNA プロセッシング異常に着目した研究をご紹介いただきました。肺腺がん 1,270 例の RNA-seq 統合解析により、mRNA キャップ修飾酵素 CMTR2 の不活性型変異が、

既知のドライバー変異とは独立した特異なスプライシング異常を引き起こすことが示されました。CMTR2はRNA修飾とスプライシングを結ぶハブとして機能しており、その破綻はがん細胞に強いスプライシング負荷を与える一方で、治療介入可能な脆弱性も生み出します。具体的には、スプライシング制御薬への合成致死性や、免疫チェックポイント阻害薬への感受性上昇が示唆されており、CMTR2が層別化バイオマーカーや免疫チェックポイント阻害療法の効率化に向けた標的となる可能性が論じられました。RNA修飾異常とがん治療という新たな研究領域の広がりを感じさせる講演でした。

講演7

国立がん研究センター 研究所免疫ゲノム解析部門
小山 正平 先生

「腸内細菌ゲノムと腫瘍免疫解析の統合による新規治療戦略の創出」

七番目の演者は、国立がん研究センター研究所免疫ゲノム解析部門の小山正平先生で、「腸内細菌ゲノムと腫瘍免疫解析の統合による新規治療戦略の創出」についてご講演いただきました。腸内細菌叢が免疫チェックポイント阻害薬(ICB)の治療効果を左右する仕組みを、分子・細胞レベルで解明した研究のご紹介でした。PD-1阻害療法に良好に反応した患者の便から新規腸内細菌株 YB328 を同定し、この菌が



CD103陽性樹状細胞の分化・活性化を促進することで、腫瘍特異的 CD8陽性 T細胞の抗腫瘍免疫を強力に誘導することが明らかにされました。さらに、腸管内で活性化され

た樹状細胞が腫瘍微小環境へ遊走し、局所で免疫応答を増強する過程や、YB328の経口投与により不利な条件下でも PD-1阻害療法の効果が高まることが示されました。特定の腸内細菌を活用してがん免疫療法の有効性を高める、斬新な治療戦略の可能性を示す内容でした。

講演8

岡山大学学術研究院医歯薬学域 (医)
腫瘍微小環境学分野

富樫 庸介 先生

「腫瘍浸潤リンパ球のゲノム異常」



最後に、八番目の演者は、岡山大学学術研究院医歯薬学域 (医) 腫瘍微小環境学分野の富樫庸介先生で、「腫瘍浸潤リンパ球のゲノム異常」についてご講演いただきました。

がん免疫療法の効果を左右する新しい要素として、腫瘍浸潤リンパ球 (TIL) のゲノム異常に注目した研究であり、これまで TIL は主に遺伝子発現やタンパク発現の面から解析されてきましたが、富樫先生らは「正常」とみなされてきた TIL にも血液腫瘍でみられるようなゲノム異常や、がん細胞由来と共通するミトコンドリア DNA 変異が存在することを明らかにしました。これらの異常を有する TIL は代謝障害を来し、活性化や長期メモリー形成が損なわれるため、抗腫瘍免疫応答、特に長期奏効が抑制される可能性が示唆されました。実際に、mtDNA 変異は免疫チェックポイント阻害薬治療における予後不良因子でもあり、TIL ゲノム異常が新たな効果予測バイオマーカーとなり得ることが示されています。現在大きな注目を集めるミトコン

ドリア DNA 変異について、深い洞察に満ちた講演でした。

最後に

今回は、ゲノム情報が生み出す新しいがんの予防と医療について、多彩かつ先駆的な講演内容が揃い、今後、がん予防・治療がますます発展していくことを期待させる内容となりました。シンポジウムの最後には、堀田知光がん研究振興財団理事長よりご挨拶をいただき、閉会となりました。

最前線の現場で研究に取り組まれている先生方によるご発表であったことから、具体的かつ活発な質疑応答が交わされました。参加された

方々からも、きわめて密度の高い最新的话题を集中的に聴講できたとの好評をいただき、主催者にとっても大変有意義なシンポジウムとなりました。最後にあらためて、素晴らしいご講演をいただいた演者の先生方、堀田理事長をはじめとするがん研究振興財団のご関係の皆様、ご後援をいただいた厚生労働省の皆様、そしてご参加いただいた皆様に御礼を申し上げて、本シンポジウムのご報告とさせていただきます。



令和7年度 がんサバイバーシップ研究成果発表会 開催報告



学校法人 埼玉医科大学 医学部社会医学
客員教授 **亀井 美登里**
(がん研究助成委員会Ⅱ委員長)

令和8年2月18日（水）に「令和7年度がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナー」を、完全オンラインにて開催しました。280名の参加申込があり、がん患者やその家族の方々、またその支援団体の方々、医療機関や大学、製薬企業の関係者などに熱心に聴講していただきました。

本稿では「第1部 がんサバイバーシップ研究成果発表会」について報告します。

本研究発表会は、平成27年度からスタートし

た「がんになっても自分らしく生きることができ力を引き出し乗り越えるための課題を明らかにし、これを解決するための研究」支援を目的とする「がんサバイバーシップ研究支援事業」の一環として、その研究成果を一般の方々とも共有するため毎年開催しているものです。

今回の発表は、令和6年度に研究助成を行った5課題（5名）についての発表となります。研究成果発表の要旨は次のとおりです。

【研究成果発表要旨】（発表順）

1. 齊藤 祐毅（東京大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

「頭頸部がんサバイバーシッププログラムの構築」

頭頸部がんの治療成績向上に伴い、生存者の多様な後遺症への対応が重要となっているが、国内のサバイバーシップケア指針は未確立である。本研究では欧米のガイドラインに基づき11項目のプログラム原案を作成し、医師と患者へ実態調査を行った。結果、禁煙等の生活指導は定着している一方、聴力や甲状腺等の晩期合併症や抑うつへの介入は不十分であった。その一方で一般耳鼻咽喉科医による対応可能性は高く、専門施設との役割分担による包括的なサバイバーシッププログラムの構築は可能である事が示唆された。

2. 中口 拓真（医療法人明星会 星野クリニック）

「地域在住の悪液質高齢がんサバイバーに対する訪問リハビリテーションの支え—生活の質と栄養状態を支える包括的な在宅ケアの実態調査—」

地域在住の悪液質高齢がんサバイバー 72名を対象に、訪問リハビリテーション介入下での日常生活動作の縦断的変化を検討した。6か月間の追跡で7名が死亡したが、生存例ではBarthel Index (BI) が平均10.7点改善した。一方、大腿四頭筋筋厚単独では大きな変化を認めなかったが、BMIで補正したSkeletal muscle Thickness Adjusted Ratio (STAR) は変化を示した。BIおよびSTARは生命予後とも関連し、在宅支援の意義が示唆された。

3. 遠山 柁介（田上病院 リハビリテーション科）

「食道癌術後患者に対する退院後の遠隔リハビリテーションシステムの展開：実現可能性の検証」

食道癌手術は侵襲が大きいため、術後の身体機能、HRQoLの低下が問題となる。本研究は、食道癌術後患者に対する退院後8週間の遠隔リハビリテーションの実現可能性を単群介入試験で検証した。ウェアラブルデバイスとビデオ通話を活用し、在宅での運動継続を支援した結果、自主運動実施率は高く、有害事象は認めなかった。また、身体活動量や運動耐容能、HRQoLの改善も認めた。一方で参加率の低さや脱落例が一定数存在し、デジタル機器操作の困難さなどの課題が残った。今後は症例数を拡大し対照群を設けた検証を行っていく予定である。

4. 西川 英里（東京都立小児総合医療センター 緩和ケア科）

「AYA世代がんサバイバーの主観的な「社会復帰」達成度と関連因子の実態解明」

本研究では、治療後に就労・復職を果たしたサバイバー 20名に、困難だったことと有用だった支援、最終的に自分らしい働き方に至るためにはどのようなことが重要だと考えるかについて回顧的にインタビューで調査した。結果、身体的な問題が特に大きな障壁ととらえられ、家族をはじめとする周囲の支援が最も有用だった半面、自分らしい働き方に至るには自身の内的な柔軟性や強靭性、人とのつながりに目を向けた回答が目立った。好事例のみの調査ではあったが、貴重な当事者の声を生かして支援体制の構築につなげていきたい。

5. 大町 太一（関西医科大学 小児科学講座）

「メタバースを活用した小児がんサバイバーがつながり合う空間の開発」

小児がん治療の進歩により長期生存者は増加しているが、退院後に同じ経験を持つ仲間と出会う機会は少なく、孤立や心理社会的課題が指摘されている。本研究では、小児・AYAがん経験者が安心して交流できる新たなピアサポートの場として、メタバース空間「Emo-Link」を開発した。利用体験の評価をもとに空間設計や機能を改良した結果、操作性とコミュニケーションの改善が認められ、満足度や再利用意向も高かった。利用者の声を反映しながら、退院後もつながり続けられる新しい居場所となることを目指している。

近年、がんの療養とこれに続く人生において直面する様々な課題について、患者自身と患者を取り巻く周囲の方々が手を携えて乗り越えていこうとする“サバイバーシップ”を大切に、充実していきたいという動きが広く普及してきました。

令和6年度からスタートした国の「がん研究10か年戦略（第5次）」でも、その柱の一つに「がんと共生に資する研究」があり、がんサバイバーの療養環境への支援に関する研究や、がん患者や家族の心理・社会的な課題の解決に資する研究などを通じ、充実したサバイバーシップを実現していくことが目標に掲げられています。

今年の発表でも、頭頸部がんの包括的なサバイバーシッププログラムや在宅でのリハビリテーション支援に係る調査研究、小児・AYA世代がんサバイバーへの心理・社会的支援の有

効性に関する研究など、「がん研究10か年戦略」で掲げる目標とも軌を一にする時宜を得た研究内容を、幅広い分野にまたがって発表していただくことができました。

本研究支援事業により、患者団体やNPO活動の活性化が図られるとともに、がんサバイバーの方を取り巻く様々な課題解決に向けたプロセスの明確化が図られてきたほか、がんサバイバーの食生活を支える簡便なレシピ集の発刊に結びつくなど、様々な成果として結実しております。

今回、発表された研究の中からも、今後のがんサバイバーの皆さんに有用な知見、成果物が誕生することを切に願っております。

令和7年度

がんサバイバーシップ研究セミナー開催報告

～がんサバイバーが地域で活用できる社会資源～



学校法人 東京医療保健大学大学院

教授 **竹内 朋子**

(がん研究助成委員会Ⅱ委員)



学校法人 京都薬科大学

常任理事 **田中 徳雄**

(がん研究助成委員会Ⅱ委員)

1. 今年度の企画について

令和8年2月18日、令和7年度「がんサバイバーシップ研究セミナー」が、完全オンラインで開催されました。

がん医療の進歩により、治療を受けながら生活し、就労し、地域で暮らし続ける「がんサバイバー」が増えています。その一方で、サバイバーが直面する課題は、治療そのものにとどまりません。孤独・孤立、就労や家計の不安、療養生活のなかでの悩みや意思決定、さらにインターネットやSNS上にあふれる玉石混交の情報への対応など、地域で暮らすからこそ生じる困難は多岐にわたります。こうした課題に向き合うためには、医療機関の中でだけで支えるのではなく、地域の中にある多様な社会資源を知り、必要な時に適切につながる事が重要です。

今年度のセミナーでは、「がんサバイバーが地域で活用できる社会資源」をテーマに、地域におけるつながりの支援、経済的課題への対応、相談支援の役割、信頼できる情報との向き合い方という四つの視点から、サバイバーの生活を支える具体的な資源とその意義について講演いただき、地域で安心して暮らし続けるための支援のあり方を考える機会とすることを目的として企画しました。

今回のセミナーには280名の参加申込があり、質疑応答も含め有意義な会となりました。また、本セミナーは厚生労働省の後援を得るとともに、健康・生活衛生局がん・疾病対策課鶴田課長のご挨拶もいただきました。

以下、各講演の概要について報告します。

2. 各講演の概要

講演1

西 智弘 氏 一般社団法人プラスケア代表理事/川崎市立井田病院腫瘍内科部長

「社会的処方と暮らしの保健室」

西氏からは、孤独・孤立を健康・寿命にも影響する重要課題として捉え、日本で進む対策の方向性を整理したうえで、地域実践として「暮らしの保健室」の取組をご紹介いただきました。孤独対策は単に人を既存の集まりへ参加させることなく、本人が安心して自分らしくいられるつながりを支えることが重要だと話されます。さらに、英国発の「社会的処方」の考え方を踏まえ、地域の多様な人や場を結び直し、孤立を予防・軽減するには、地域全体で支え合う網の目を育てることが必要であることを強調されました。

講演2

黒田尚子 氏 黒田尚子FPオフィス代表/一般社団法人患者家計サポート協会 顧問

「ファイナンシャルプランナー (FP) によるがんサバイバー支援における役割と必要性」

黒田氏からは、がん医療の進歩により生存期間が延びる一方で、がんサバイバーが治療と生活・就労を長期にわたり両立しなければならず、医療費、収入減、保険、年金、教育費、住宅ローンなど複合的な経済課題に直面している実態を整理していただきました。その上で、FPは制度説明にとどまらず、家計の可視化、療養中の資金繰り、ライフプラン再構築、就労変化を踏まえた生活設計支援を担い、医療・福祉職と連携して患者・家族の長期的安定とQOL向上に寄与する重要な専門職であることが述べられました。

講演3

清水恵理子 氏 国立がん研究センター中央病院 がん相談支援センター がん相談専門統括職

「そうだ、がん相談支援センターにいこう~不安を話せる場所がある~」

清水氏からは、国立がん研究センター中央病院「がん相談支援センター」は、がん患者だけでなくサバイバーや家族の不安・困難に対し、無料・匿名で継続的支援を行う重要な窓口であることが紹介されました。支援の中心は「とにかく話を聞く」姿勢にあり、意思決定支援や心理的負担の軽減、生活・就労・家族関係に関する相談に広く対応することであり、症例報告からも、相談を通じて孤立を防ぎ、

安心して療養と社会生活を続ける基盤となっていることが報告されました。今後の課題として、周知の強化、人員体制整備、相談員教育について言及されました。

講演4

三上 洋氏 ITジャーナリスト

「がんサバイバーによるSNS・YouTubeの活用と問題点」

三上氏からは、ご自身のがん罹患経験を踏まえ、SNS上で拡散するがん関連の誤情報や疑似医療の危険性を論じていただきました。病状や治療内容を自ら積極的に公開し、その結果として善意を装った民間療法の勧誘や、反ワクチンの言説、根拠の乏しい治療情報が多数寄せられた実態を紹介いただきました。特に、SNSや検索エンジンのアルゴリズムが、利用者の不安や関心に応じて偏った情報を増幅し、いわゆる「フィルターバブル」を形成する点を問題視されていました。また、誤情報をミス・インフォメーション、デイス・インフォメーション、マル・インフォメーションに整理した上で、人が偽情報に惹かれる背景には、不安の強さや「分かりやすい答え」を求める心理があることを指摘されました。結論として、SNS情報を鵜呑みにせず、公的機関の信頼できる情報に継続的にアクセスし、最終的には主治医との対話を通じて治療判断を行う重要性を強調していただきました。

3. まとめ

今回のセミナーでは、がんサバイバーを支える社会資源は、医療制度や福祉サービスに限られず、地域の居場所、家計や生活設計を支える専門職、悩みを受け止める相談窓口、信頼できる情報へアクセスする力など、幅広い要素から成り立つことが示されました。重要なのは、個々の資源が単独で存在するのではなく、サバイバーの状況に応じて適切につながり、継続的に支えることにあります。今後は、地域にある資源を可視化し、必要な人に確実に届く仕組みを整えるとともに、医療・福祉・地域住民・専門職が連携して支援の網の目を育てていくことが一層求められます。

4名の講演者の皆さまには、時宜に叶った素晴らしいご講演をいただいたことに改めて感謝申し上げますとともに、今後の一層のご活躍を祈念申し上げます。また、本セミナーは、がん研究振興財団「がん研究助成金委員会Ⅱ」各委員の先生方との議論を通じて実現することができました。先生方のご協力に対し、あらためて深く御礼申し上げます。

令和7年度 事業実績

- 1. がん情報提供支援事業運営委員会報告 …… 24
委員長 上田 龍三
- 2. がん研究助成委員会Ⅰ報告 …… 27
委員長 村上 善則
- 3. がん研究助成委員会Ⅱ報告 …… 33
委員長 亀井 美登里
- 4. 海外派遣研究助成委員会報告 …… 36
委員長 菅野 純夫

がん情報提供支援事業運営委員会報告

委員長

上田 龍三（名古屋大学 特任教授）

令和3年10月に当財団HP上に開設した“患者本位の「がん治験情報サイト」”につきましては、①信頼できる最新の治験情報の提供、②がん患者・家族にも理解可能な平易な表現、③作用機序等の追加情報の提供等をコンセプトに運用し、令和5年度までに全がん種（領域）の企業治験情報の登録を完了する一方、医療機関ごとの企業治験情報の検索が可能となる「総合検索情報システム」機能を追加しました。

さらに、令和6年度には利用者の皆さんのニーズに応じて、サイトレイアウトを全面リニューアルしたと共に、①小児・AYA世代など企業治験数の少ない領域での医師主導治験情報等の提供、②フリーワード検索機能の搭載による検索の効率化、③用語集やリンク集の充実等、一層の機能拡充を図ったところ です。

こうした検索機能の向上に伴い当サイトへのアクセス数も着実に増加し、直近のデータでは毎月約3万件的延べアクセス件数を記録（実アクセス人数は約3～4千人/月）し、がん患者・家族等に幅広く活用されている状況がうかがえます【グラフ参照】。これにより患者が身近な医療機関で治験に参加する機会が増大し、治験症例数の確保、承認申請の迅速化が図られることで、新薬の市場投入の促進及び多くのがん患者にとっての治療選択肢の拡大も期待できるものと考えます。

運営委員会では、専門医と企業のご協力をいただき科学性、倫理性を検証した上で、がん患者にも理解可能となるよう編集した情報をHP上に掲載しております。本事業により、日本での治験ががん患者・家族や担当医師により正しく理解され、治験事業の一層の進展が図られることを念じております。

本稿では、令和7年度のがん情報提供支援事業の実績及び令和8年度事業計画について報告します。

I. 委員会等の開催状況

1. がん情報提供支援事業運営委員会・がん情報サイト企画専門委員会合同会議

令和7年9月3日 審議

2. がん情報検証部会拡大会議

令和7年11月14日 審議

3. 患者本位の「がん治験情報サイト」企業説明会開催 令和8年3月31日

(1) 患者本位の「がん治験情報サイト」の利便性向上について

- ・サイトレイアウトの簡素化による検索プロセスの効率性向上
- ・国立がん研究センターとの連携強化によるサイト情報更新の迅速化
- ・企業治験情報の全領域取載による情報提供体制の確立
- ・フリーワード検索機能の更なる充実

(2) 令和8年度事業計画について

- ・事業方針案
- ・サイト情報の更新計画案



(3) がんサバイバーシップ研究支援事業「患者の治験・臨床試験情報へのアクセスの実態と課題に関する実態調査」(NPO 法人肺がん患者の会ワンステップ理事長 長谷川一男) 結果の解説

II. 令和7年度事業実績

1. 患者本位の「がん治験情報サイト」定期更新

- 令和7年 5月13日 第1期公表
- 令和7年 8月 2日 第2期公表
- 令和7年11月12日 第3期公表
- 令和8年 2月12日 第4期公表

2. 患者本位の「がん治験情報サイト」システムの開設・広報活動

- 令和7年 5月14日 厚生労働省 HP 上に当情報サイトリンクの掲載
- 令和7年 7月 全がん連加盟団体を中心に患者会へ PR 活動
- 令和7年 8月 全国がん診療連携拠点病院・都道府県へ PR 活動

3. 患者本位の「がん治験情報サイト」活動実績（2026年2月現在）

- 令和7年度アクセス総数 約34万件
- 令和7年度情報改訂回数 約100回

Ⅲ. 令和8年度事業計画

1. 患者本位の「がん治験情報サイト」運営事業実施計画

①基本情報システム

- ・全がん種の企業治験情報の定期的な更新（4半期単位）

②総合検索情報システム

- ・小児がん・AYA世代のがんに関する医師主導治験及び特定臨床研究情報の定期的な更新（2か月単位）
- ・患者団体等のサイトユーザーや治験実施企業からの要望に対応した検索システムの充実強化

2. 予算額 計 2,200 万円

- | | |
|---------------|----------|
| ①人件費（2名分） | 1,200 万円 |
| ②委員会経費 | 100 万円 |
| ③システム管理費 | 300 万円 |
| ④検索システム開発・運営費 | 500 万円 |
| ⑤事務経費 | 100 万円 |

がん研究助成委員会 I 報告

委員長

村上 善則 (学校法人 日本医科大学 先端医学研究所 特命教授、東京大学名誉教授)

1. がん研究助成金 I について

がん研究助成委員会 I における審議概要について報告します。

がん研究助成事業は、がん研究の進歩・発展に貢献することが期待される研究に対して、がん研究振興財団が設立当初から実施している助成事業であり、通算すると今年で58回目となります。令和7年度より、これまでの「がん研究助成金 (A)」と「(HOPE 事業) TR 若手研究者教育事業」について、若手研究者への研究支援の趣旨を一層明確化する観点から統合し、「がん研究助成事業 I」として運営を開始しました。

この研究助成事業は、財団の公益事業にご賛同をいただいた一般の方々からの御芳志を財源に実施させていただいているものです。改めて、貴重なご寄付に感謝申し上げます。

今年度のがん研究助成委員会 I は、令和8年2月12日に開催しました。

委員の村上善則 (委員長)、牛島俊和、坂本亨宇、菅野純夫、藤田直也、(敬称略) の5名及びがん研究振興財団堀田理事長、石塚専務理事の出席のもと、令和7年度の交付者の最終選考が行われました。

助成対象となる課題は、若手研究者が主体的に実施する、がんの本態解明を含む基礎研究からシーズの実用化に向けた応用研究、がん診療の現場における臨床研究、トランスレーショナル研究に至るまでの幅広いがん研究分野です。

若手研究者への研究支援を念頭に、応募対象者は、

- ① 現在、大学院の博士課程に在籍し、指導教員等の承諾を得た者、
- ② 日本の研究期間に所属し、博士学位取得後8年未満であり、研究を指導する立場にある方に承諾を得た者、

としております。特に、大学院博士課程在籍者を対象者に含めている点は、本研究助成事業を特徴付けるものとなっています。

がんに係る基礎研究は、新たな診断法・治療法の基盤を築くものであり、その継続的な発展には若手研究者への支援が重要となります。上記で若手研究者と定義する大学院博士課程から博士号取得後8年の時期は、独創的な着想を研究として具体化する重要な段階である一方で、研究資金や環境の確保が難しい時期でもあり、この段階で適切な支援を行うことにより、有望な人材の研究継続を後押しし、将来の優れた成果の創出と、がん研究全体の厚み・持続性の確保に繋がることを期待するものです。

2. がん研究助成委員会 I について

がん研究助成金 I に係る審議を行うため、次の 5 名により構成されています。(五十音順、敬称略)

牛島 善則 (学校法人 星薬科大学 学長)

坂元 亨宇 (学校法人 国際医療福祉大学 医学部長、慶應義塾大学 名誉教授)

菅野 純夫 (一般社団法人 柏の葉オーミクスゲート 代表理事、東京大学 名誉教授)

藤田 直也 (公益財団法人 がん研究会 がん化学療法センター 所長)

村上 頼則 (学校法人 日本医科大学先端医学研究所 特命教授、東京大学 名誉教授)

3. 令和7年度研究助成について

令和7年9月1日～10月31日の間、当財団HPにて公募を行い、86件の申請がありました(うち、31件(36%)が大学院博士課程在籍者からの申請でした)。各委員による事前審査などを踏まえ、委員会にて個別に評価した結果、20件の申請課題を選考し、一課題100万円以内の助成を行うことを決定しました。(別掲採択者20名、うち大学院博士課程在籍者は3名(15%))

	氏名	所属機関	研究課題名
1	高倉 勇氣	明治薬科大学	DNA 障害性抗がん剤の感受性を規定するミトコンドリア DNA 応答機構の解析
2	張 萌琳	東京医科大学病院	Lynch 症候群における皮膚病変の全国多施設共同調査—臨床遺伝学的特徴の解明
3	中島 正夫	山口大学大学院	抗腫瘍免疫記憶の誘導を通じた肝細胞癌術再発に対する革新的治療法の開発
4	神谷 知憲	大阪公立大学大学院	炎症環境が誘導する T 細胞疲弊と腫瘍形成機構の解明
5	桃井 悠作	国立がん研究センター研究所	腸内細菌—胆汁酸—免疫ネットワークによる胆道癌免疫制御機構の解明と新規治療法開発
6	辻 翔平	岐阜薬科大学	膠芽腫幹細胞の可塑性を規定する分子基盤の解明
7	田中 潤奈	京都薬科大学	コレステロール生合成阻害薬を用いた染色体数倍化細胞のがん治療標的化
8	河内 大輔	国立がん研究センター中央病院	脳脊髄液に対するプロテオーム解析および機械学習に基づく高精度疾患分類モデルの構築
9	杉本 敦史	大阪公立大学大学院	膵癌の腹膜転移機序に立脚した新規治療法の開発
10	西村 貞徳	大阪公立大学大学院	膵星細胞由来 CAF における STING 制御解除による膵がん免疫活性化機構の解明
11	明栗 安剛	大阪国際がんセンター	がん細胞の休眠遷移における形態変化とその制御機構の解明
12	熊谷 尚悟	がん研究会 がんプレジジョン医療研究センター	神経内分泌がんに対する新規がん免疫治療戦略の検討
13	中塚 健吾	がん研究会 有明病院	皮弁のうっ血・虚血状態を色調で判断するシステム開発
14	齋藤 慈	千葉県がんセンター研究所	ランゲルハンス細胞を介した新規発がん制御機構の解明
15	竹内 麻里子	国立がん研究センター研究所	独自の次世代標的探索法を用いた膵臓がんの創薬標的の探索
16	小林 拓郎	順天堂大学大学院	進行腎細胞がんにおける免疫療法反応性の分子機構解明と予測モデル構築
17	辰巳 暁哉	国際医療福祉大学	MYC 過剰発現下における癌細胞生存協調機構の包括的解明
18	小松 美結	帝京大学	染色体欠失作成を可能とする基盤技術による染色体欠失を持つがん特異的治療法の開発
19	牧野 祐紀	大阪大学大学院	統合的 Glyco-Transcriptomics 解析に基づく膵嚢胞性前癌病変の治療標的・バイオマーカーの同定
20	山崎 昌哉	がん研究会がん研究所	肥満がもたらす膵がん未病状態及び発がんの理解とがん予防的アプローチの探求

高倉 勇氣

●明治薬科大学

研究課題名

DNA 障害性抗がん剤の感受性を規定するミトコンドリア DNA 応答機構の解析

研究内容

DNA 障害性抗がん剤はがん細胞を死滅させて治療効果を発揮する。一方で、抗がん剤耐性や副作用の問題となっている。細胞内にはミトコンドリアがもつ環状 DNA (mtDNA) が存在しており、核内 DNA と同様に抗がん剤が作用する可能性があるが、不明な点が多く残されている。申請者は抗がん剤をがん細胞に作用させると、mtDNA が細胞質に放出されて細胞死シグナルを活性化することを見出した。本研究では、ミトコンドリアに着目して抗がんによる mtDNA 細胞質放出の分子メカニズムおよび抗がん剤感受性との関連性を解明する。

張 萌琳

●東京医科大学病院

研究課題名

Lynch 症候群における皮膚病変の全国多施設共同調査—臨床遺伝学的特徴の解明

研究内容

Lynch 症候群は大腸癌や子宮内膜癌をはじめとした多様ながんを生じやすい遺伝性腫瘍症候群であり、皮膚病変も本症候群の関連病変の一つとして知られている。しかし、本邦での Lynch 症候群に伴う皮膚病変の全国規模での調査は行われておらず、頻度や臨床的特徴、遺伝学的背景等が明らかでないことから、皮膚病変を契機とした Lynch 症候群の診断が適切に行われていない可能性がある。多施設共同研究により本邦での Lynch 症候群に伴う皮膚病変の実態を把握し、早期診断やサーベイランス体制の改善に寄与することを目指す。

中島 正夫

●山口大学大学院

研究課題名

抗腫瘍免疫記憶の誘導を通じた肝細胞癌術再発に対する革新的治療法の開発

研究内容

肝細胞癌は術後再発が多く、再発巣は免疫排除型で免疫チェックポイント阻害薬 (ICI) 単独の効果が限られる。本課題では周術期に独自開発した複合免疫製剤を投与し、腫瘍を“ワクチン源”とした抗腫瘍免疫記憶の誘導を通じて、再発に対する ICI 治療効果増強というコンセプトを検証する。既に終了した臨床試験の検体を用いて PBMC と腫瘍微小環境を縦断解析し、マウスモデルで再発巣への T 細胞誘導機序と ICI 併用による再発抑制効果を検証する。将来的に多施設共同試験へ展開して初の再発予防法確立に繋げたい。

神谷 知憲

●大阪公立大学大学院

研究課題名

炎症環境が誘導する T 細胞疲弊と腫瘍形成機構の解明

研究内容

慢性炎症を背景としたがん発生の免疫学的基盤の解明を目指し、細胞傷害性 T 細胞が疲弊 T 細胞とその前駆細胞へと変容する意義に着目します。これらを単なる機能低下ではなく免疫制御の一形態、病態形成の要因として捉え直し、炎症から腫瘍形成へ至る過程の理解を深めたいと考えています。基礎研究者として丁寧な検証を重ね、新たな視点の提示を目指します。さらに、得られた知見を通じて慢性炎症関連がんの理解を深化させ、将来的な研究の発展につながる基盤づくりに貢献したいと考えています。

桃井 悠作

●国立がん研究センター研究所

研究課題名

腸内細菌—胆汁酸—免疫ネットワークによる胆道癌免疫制御機構の解明と新規治療法開発

研究内容

胆道癌における免疫チェックポイント阻害薬の奏効率は未だに限定的であり、より有効な免疫治療の開発が望まれる。胆道癌は胆汁に富む特異な代謝環境を特徴とするが、胆汁の主成分である胆汁酸は腸肝循環の過程で腸内細菌叢により多様な修飾を受け、様々な生理活性を発揮することが知られている。本研究では、胆道癌患者の腫瘍・胆汁・便検体の統合解析による仮説構築とその実験的な検証を組み合わせることで、特定の細菌遺伝子が胆汁酸修飾を介して抗腫瘍免疫を制御する機構を解明し、胆汁酸や細菌を用いた新たな免疫療法の開発を目指す。

辻 翔平

●岐阜薬科大学

研究課題名

膠芽腫幹細胞の可塑性を規定する分子基盤の解明

研究内容

本研究では、難治性悪性脳腫瘍である膠芽腫の根治を目指し、がん細胞の「可塑性」を制御する新規分子の同定に挑みます。膠芽腫は既存療法への抵抗性が高く、がん幹細胞と非幹細胞が可逆的に移行する可塑性が再発の主要因と考えられています。独自に確立した可塑性誘導実験系にCRISPRスクリーニングを適用し、新規可塑性制御因子を特定・機能解析することで、従来の標的療法を凌駕する革新的治療基盤の構築を目指します。本研究を通じ、予後不良な膠芽腫患者の救済に資する成果を導き出すべく、真摯に研究に邁進する所存です。

田中 潤奈

●京都薬科大学

研究課題名

コレステロール生合成阻害薬を用いた染色体数倍化細胞のがん治療標的化

研究内容

コレステロール生合成阻害薬であるスタチン類は、脂質異常症治療薬である一方で、抗がん作用を示すことが報告されています。しかし、スタチン類ががんに寄与する報告もあり、コレステロール代謝物とがんの関係は不明な点も多いです。そこで、コレステロール代謝に強く依存するがんの特徴を見出すべく、がんの悪性化や治療抵抗性に寄与する染色体数の倍化に着目しました。本研究では、コレステロール生合成阻害薬に対する染色体数倍化細胞の感受性と感受性を示す機構を解明し、倍化細胞を標的とした新規がん治療戦略の提示を目指します。

河内 大輔

●国立がん研究センター中央病院

研究課題名

脳脊髄液に対するプロテオーム解析および機械学習に基づく高精度疾患分類モデルの構築

研究内容

成人原発性悪性脳腫瘍では画像診断のみでの確定診断には限界があり、通常は手術で得た組織検体の病理学的・分子学的解析が必要である。しかし手術は脳への侵襲を伴い一定の合併症リスクがあり、脳幹など深部病変では検体採取が困難である。本研究ではOrbitrap Astral LC-MSによる脳脊髄液プロテオーム解析と機械学習を用いて膠芽腫と中枢神経系原発悪性リンパ腫の特徴タンパク質を同定し、高精度疾患分類モデルを構築することで新規低侵襲リキッドバイオプシー診断法の確立を目指す。

杉本 敦史

●大阪公立大学大学院

研究課題名

膵癌の腹膜転移機序に立脚した新規治療法の開発

研究内容

膵癌は極めて予後不良な難治癌であり、膵癌の腹膜転移メカニズムについては十分に解明されていない。私はこれまで癌細胞と間質細胞の相互作用に着目した腹膜転移機序の解明を目指して研究活動を行って参りました。本研究では、膵癌微小環境における膵星細胞の役割を解明し、膵癌腹膜転移のバイオマーカーおよび治療法の開発を目的とします。この度は本研究のご支援をいただき心より感謝申し上げます。将来のがん治療に役立つような成果を出せるよう、精一杯頑張ります。これからも患者さんのためになる研究を続けていきたいと思っております。

西村 貞徳

●大阪公立大学大学院

研究課題名

膵星細胞由来CAFにおけるSTING制御解除による膵がん免疫活性化機構の解明

研究内容

膵癌は高度な線維性間質により免疫応答が抑制された“cold tumor”であり、免疫療法の効果が限定的である。本研究では、膵星細胞由来癌関連線維芽細胞(CAF)における選択的オートファジー分子NBR1およびp62が自然免疫センサーSTINGの活性制御に果たす役割を解明し、腫瘍免疫環境形成機構の理解を目標とする。CAF内在性の分子制御機構に着目することで、免疫抑制性微小環境を可逆的に制御し得る新規治療標的の創出を図り、基礎研究と臨床研究の融合を通じて膵癌集学的治療成績の向上を目指す。

明果瑠 - 安岡いるま ●大阪国際がんセンター

研究課題名

がん細胞の休眠遷移における形態変化とその制御機構の解明

研究内容

がん再発の主因の1つである休眠がん細胞は、可逆的なG0期で長期間生存した後に再増殖し、再発へと至る。また、代謝機能が低下した静止状態であることも知られており、可視化・追跡することが困難である。休眠がん細胞の特性の理解と検出技術の開発は重要な課題である。申請者らの研究グループは、人為的に休眠状態を誘導し追跡する、独自のモニタリング系を確立した。本研究では、休眠がん細胞の形態に着目し、休眠がん細胞特異的な病理所見から、休眠がん細胞の診断基盤を構築する。

熊谷 尚悟 ●がん研究会 がんプレジジョン医療研究センター

研究課題名

神経内分泌がんに対する新規がん免疫治療戦略の検討

研究内容

この度は、がん研究助成金Iにご採択いただき、心より御礼申し上げます。本研究では、神経内分泌がんにおける免疫逃避機構を免疫シナプス形成の観点から解明し、新規免疫治療戦略の確立を目指します。神経伝達物質を介した免疫抑制性マクロファージによるT細胞機能制御という独自仮説のもと、空間トランスクリプトミクスなどの手法を用いて分子基盤を明らかにし、二重化抗体治療や免疫チェックポイント阻害療法の治療効果向上に資する新規標的を創出することにより、難治性神経内分泌がんの克服に貢献したいと考えております。

中塚 健吾 ●がん研究会有明病院

研究課題名

皮弁のうっ血・虚血状態を色調で判断するシステム開発

研究内容

本研究は、遊離皮弁のうっ血・虚血状態に伴う色調変化を客観的に数値化し、血流障害を早期かつ的確に判定できる新たな評価システムの確立を目指すものである。術後管理はこれまで術者の経験や主観に依存する部分が大きく、早期異常検出と客観性の担保が課題である。本研究により、誰もが再現性高く判断できる客観的指標を確立し、臨床現場へ広く普及させたい。最終的には皮弁救済率のさらなる向上と、より安全で質の高い再建医療の発展に貢献することを強く志している。

齋藤 慈 ●千葉県がんセンター研究所

研究課題名

ランゲルハンス細胞を介した新規発がん制御機構の解明

研究内容

本研究は、DMBA/TPA多段階皮膚発がんモデルおよび順遺伝学的解析を用い、皮膚に存在する免疫細胞「ランゲルハンス細胞(LCs)」が、がん発症をどのように制御しているのか解明することを目的とします。申請者はこれまで、がん発症過程におけるLCsの機能的な重要性に着目し研究を推進してきました。本研究ではLCsの分化・活性化および炎症応答制御機能を免疫学的・遺伝学的手法により解析し、発がん抵抗性の分子基盤を明らかにすることで、LCsを標的とした新規がん免疫治療戦略につながる知見の創出を目指します。

竹内 麻里子 ●国立がん研究センター研究所

研究課題名

独自の次世代標的探索法を用いた膵臓がんの創薬標的の探索

研究内容

膵臓がんは5年生存率が10%に満たない難治性がんです。その約9割にKRAS変異が認められますが、膵臓がんが多いG12DやG12V変異を対象とした治療法の開発は進んでいません。本研究では、独自に構築してきた次世代型のゲノム網羅的標的探索手法と、独自性の高い膵臓がん患者由来細胞株を活用し、KRAS変異型に特異的な合成致死標的を新たに見出します。本成果を基に、マウスモデルでの検証やメカニズム解明を進め、創薬標的としての科学的根拠を実証し、製薬企業への導出を目指します。

小林 拓郎

● 順天堂大学大学院

研究課題名

進行腎細胞がんにおける免疫療法反応性の分子機構解明と予測モデル構築

研究内容

進行腎細胞がんに対する免疫チェックポイント阻害薬治療は長期生存をもたらす一方、治療効果や免疫関連有害事象の予測は依然として困難です。本研究では、血中循環腫瘍細胞解析とT細胞受容体(TCR)レパトア解析を組み合わせ、免疫療法応答を予測する新たなバイオマーカーの探索を行います。特にシングルセルレベルでTCRクローン動態を解析することで、免疫応答の特徴を明らかにし、進行腎細胞がんにおける個別化免疫医療の実現に貢献することを目指します。

辰巳 暁哉

● 国際医療福祉大学

研究課題名

MYC過剰発現下における癌細胞生存協調機構の包括的解明

研究内容

MYCは多様な癌で過剰発現し腫瘍形成を促進する一方、その過剰発現は細胞死を誘導するという相反する特性を有する。しかしながら、多くの癌でMYC過剰発現が認められる臨床的事実は、癌細胞において「MYC過剰発現誘発細胞死」を回避し生存を可能にする協調機構の存在を示唆している。我々は先行研究において本機構に関わる因子を1種同定したが、網羅的同定には至らなかった。本研究では最適化したCRISPRスクリーニング法により、MYC過剰発現に協調する因子を網羅的に同定し、その分子基盤を解明することを目指す。

小松 美結

● 帝京大学

研究課題名

染色体欠失作成を可能とする基盤技術による染色体欠失を持つがん特異的治療法の開発

研究内容

がんを高頻度で見られる染色体欠失は予後不良や治療抵抗性に直結するが、広範な染色体欠失を精密に再現できる実験モデルは乏しく、その分子機構の解明や創薬研究は十分に進んでいない。本研究では、CRISPR-Cas9を応用した独自の染色体大規模欠失誘導法(CRISPR-OUT法)により、特定の欠失を有する同系細胞株を作製し、これらを用いて形質変化や薬剤感受性を網羅的に解析することで、欠失特異的な脆弱性を同定する。欠失を「弱点」として標的化する新たな治療概念を確立し、治療抵抗性腫瘍の克服に貢献したい。

牧野 祐紀

● 大阪大学大学院

研究課題名

統合的Glyco-Transcriptomics解析に基づく膵嚢胞性前癌病変の治療標的・バイオマーカーの同定

研究内容

膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)は画像検査で検出できる膵前癌病変であり、前癌段階から治療介入の機会が得られるが、病態解明が十分に進んでおらず手術以外に有効な薬物治療が存在しない。

IPMNは糖鎖修飾により性質が大きく変化する糖タンパクやムチンが豊富な粘液性腫瘍であるため、病態解明には腫瘍の糖鎖解析が大きな意義をもつ。本研究では、腫瘍組織を用いた網羅的糖鎖解析と空間解析によりIPMNの進展に伴う糖鎖変化と関連遺伝子発現変化を解明し、IPMNに対する新規治療標的・バイオマーカーの同定を目指す。

山崎 昌哉

● がん研究会がん研究所

研究課題名

肥満がもたらす膵がん未病状態及び発がんの理解とがん予防的アプローチの探求

研究内容

膵がんは、日本および世界における主要ながん死亡原因の上位にあり、治療法開発だけでなく、早期発見と予防法の欠如が克服すべき重要な課題である。近年、膵がんの発生は遺伝学的要因に加え、環境要因、特にライフスタイル要因が発症リスクや腫瘍進展に影響を及ぼす可能性が注目されている。本研究は、肥満によって引き起こされる低度の慢性炎症や代謝の変調が、膵組織へ変容を及ぼし、膵がん発生における未病状態や発がん母地を形成するのではないか、との仮説のもと、膵がん未病運命決定因子の同定を目指す。

がん研究助成委員会Ⅱ報告

委員長

亀井 美登里 (学校法人 埼玉医科大学 客員教授)

1. がん研究助成金Ⅱについて

がん研究助成金Ⅱは、令和6年度までの日常のがん診療や療養上の具体的な問題解決を目的とする「がん研究助成金(B)」、及びがんサバイバー支援を目的とする「がん研究助成金(C)」を統合し、実務型研究分野への助成事業として令和7年度から開始したものです。研究助成の目的は、がんサバイバーの療育支援をはじめ、日常生活の療養上の具体的な問題解決を目的とした研究を支援することであり、これらの研究を行う医療者、研究者、個人、グループ・団体、企業等を助成の対象としています。

がんサバイバーに係る研究支援は、治療成績の向上に伴い、治療後を生きる人々が増える中で、ますます重要となっています。再発・晩期合併症の管理に加え、就労、生活の質、心理的負担、家族支援など、治療後の課題は多面的です。こうした実態を把握し、根拠に基づく支援策や医療・福祉・就労支援の連携体制を整えるためには、がんサバイバーシップに着目した継続的な研究支援が不可欠であり、このため、当財団では平成27年度から、我が国のがんサバイバーシップに関する研究の進歩・発展に大きく貢献できる研究課題に対する研究支援を行っています。

また、がん診療や療養の現場では、症状緩和、副作用対策、療養生活の継続、通院負担の軽減、意思決定支援など、日常のかつ切実な課題が数多く存在します。これらの具体的問題の解決を目的とした研究は、医療者の経験則を検証するなど、患者にとって実効性の高い支援方法を明らかにする点で重要です。継続的な研究支援を通じて現場発の知見を蓄積し、診療の質と療養生活の安定を着実に高めていくことが求められます。

2. がん研究助成委員会Ⅱについて

がん研究助成金Ⅱに係る審議を行うため、次の名6名により構成されています。(五十音順、敬称略)

亀井 美登里 (学校法人 埼玉医科大学 客員教授)

高橋 都 (NPO 法人日本がんサバイバーシップネットワーク代表理事)

竹内 朋子 (学校法人 東京医療保健大学大学院 教授)

田中 徳雄 (学校法人 京都薬科大学 常任理事)

若尾 文彦 (国立がん研究センターがん対策情報センター本部 副本部長)

3. 令和7年度研究助成について

令和7年9月1日～10月31日の間、当財団HPにて公募を行い、50件の申請がありました。各委員による事前審査などを踏まえ個別に評価した結果、5件の申請課題を選考し、一課題50万円以内の助成を行うことを決定しました。

	氏名	所属機関	研究課題
1	生田 国大	名古屋大学医学部附属病院 整形外科病院	小児・AYA患者の Parasports 参加支援と QOL 向上に向けた取り組み
2	柴田 麻美	福井県済生会病院	がんの親をもつ未成年の子どもに対する長期的な支援の継続要因に関する質的研究
3	街 勝憲	国立がん研究センター がん対策研究所	乳がん診療ガイドラインにおける身体活動推奨の到達度と行動化プロセスの全国調査：医療者とサバイバー双方の視点から
4	近藤 心	徳島大学病院 リハビリテーション部	上部消化器がん術後患者に対する ICT 活用身体活動支援パッケージの安全性および継続性の検討
5	千葉 宏依	東京大学大学院 医学系研究科	がん患者と家族の経済毒性軽減に向けたがん治療費用コミュニケーション実践ガイドの開発

生田 国大

●名古屋大学医学部附属病院 整形外科病院

研究課題名

小児・AYA患者のparasports参加支援とQOL向上に向けた取り組み

研究内容

私達は、小児・AYAがん患者が身体障害を抱えた後も主体的に社会参加できるようparasports参加を支援し、QOL向上を図る取り組みを行う。院内の医師・リハビリ・ソーシャルワーカーが連携して対象者を把握し、地域の障害者スポーツセンターや行政と橋渡しを行うとともに、体験会や情報提供を実施する。さらにアンケート調査により身体機能や健康関連QOLへの影響を評価する。parasports医として患者一人ひとりに寄り添い、運動を通じた自信回復と社会参加を支える仕組みを構築し、地域に根ざした共生社会の実現に貢献したい。

柴田 麻美

●福井県済生会病院

研究課題名

がんの親をもつ未成年の子どもに対する長期的な支援の継続要因に関する質的研究

研究内容

本研究の目的は、親ががんと診断されてから、治療期・終末期・死別・死別後へと経過する過程で、未成年の子どもが成長と共に抱く思いがどのように変化するかを明らかにし、その変化に応じてどのような支援が継続されているのかを質的に検討することである。子ども・養育者・医療者へのインタビューを通じ、発達段階に応じた切れ目ない支援の在り方について探索する。得られた知見からより実効性のある支援モデルの構築し、実践の質の向上に貢献したい。

街 勝憲

●国立がん研究センターがん対策研究所

研究課題名

乳がん診療ガイドラインにおける身体活動推奨の到達度と行動化プロセスの全国調査：医療者とサバイバー双方の視点から

研究内容

乳がんサバイバーにおいて、倦怠感やQOLの改善、再発・予後の向上を目的として、定められた水準以上の身体活動を維持することが診療ガイドラインで強く推奨されている。しかし、2019年の全国調査では、約半数が推奨の水準を満たしていない実態が示された。その後のガイドライン改訂や情報提供環境の変化を踏まえ、本研究では全国規模の再調査を実施する。身体活動の認知・実践状況や阻害要因を解明し、前回調査からの変遷を分析する。今後、サバイバーが安心して活動的な生活を送ることができる社会の実現に貢献したい。

近藤 心

●徳島大学病院 リハビリテーション部

研究課題名

上部消化器がん術後患者に対するICT活用身体活動支援パッケージの安全性および継続性の検討

研究内容

上部消化器がん術後患者では、手術侵襲に加え、身体活動の低下によりサルコペニアの新規発症や進行が臨床上の課題となっている。しかし、我が国においては退院後の在宅期における継続的な運動支援体制は十分とは言えない。本研究では、入院中の監視下運動と退院後のオンライン動画支援を組み合わせたICT活用身体活動支援パッケージを開発し、その安全性と継続性を検証する。がんサバイバーが在宅でも安心して運動を継続できる仕組みを構築し、医療機関と地域をつなぐ切れ目ない支援モデルの確立を目指す。

千葉 宏依

●東京大学大学院 医学系研究科 医療コミュニケーション学分野

研究課題名

がん患者と家族の経済毒性軽減に向けたがん治療費用コミュニケーション実践ガイドの開発

研究内容

がん治療における経済毒性は、治療中断や治療回避を招く深刻な課題ですが、本邦では、治療開始前の十分な話し合いが行われにくい現状があります。本研究では、対話を阻む医療者の心理的障壁と、患者・家族・医療者の三者間の相互作用について、日本独自の文化的背景に着目して解明します。さらに、実情に即した「実装ガイド」を構築し、医療者の心理的負担の軽減と対話の促進、ならびにサバイバーのQOL向上に寄与することを目指します。皆様の実情に寄り添い、不安を軽減する一助となる成果を導けるよう、実直に研究を完遂してまいります。

海外派遣研究助成委員会報告

委員長

菅野 純夫（一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事、東京大学名誉教授）

1. 海外派遣研究助成事業について

がん研究振興財団は、がんに関する研究の研究助成を行うとともに、その成果の還元・普及を図り、もってがんの予防・診断・治療に寄与することを目的に、種々の事業を行っています。

その中で本委員会が担当しているのは、研究助成事業の中で行われる「海外派遣研究者への助成事業」です。

がんを専門分野とする医師をはじめとする研究者による海外での研究成果の発表、研究に関する協議、研究施設調査、研究資料の収集等の先進的な研究活動に必要な海外派遣について研究助成を行うものです。

応募の資格は、がんに関する基礎研究や臨床研究に従事する医師をはじめとする若手研究者で将来指導者として期待され、所属長からの推薦者となっています。

2. 海外派遣研究助成委員会について

海外派遣研究助成事業に係る審議を行うために本財団に設置され、次の3名により構成されています。（五十音順、敬称略）

菅野 純夫（一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事、東京大学 名誉教授）

藤田 直也（公益財団法人がん研究会 がん化学療法センター所長）

若尾 文彦（国立がん研究センターがん対策情報センター本部 副本部長）

3. 令和7年度研究助成について

本研究助成事業の募集は、年間を通じ行っており、令和7年度は18件の応募がありました。令和7年度の助成金額は、総額200万円以内で、1件20万円以内の助成を行うこととしています。

委員会としての助成決定に当たって、

- (1) 研究成果の重要性。
- (2) 参加希望者の将来性。
- (3) 所属長の推薦理由。
- (4) 参加希望学会の重要性。
- (5) 同じ学会に参加する申請の場合、口演か、示説か。
- (6) 一部の研究機関等への助成に偏らないよう公平性を考慮。
- (7) 過去に助成を受けた頻度を勘案し、特定の個人に偏らないよう公平性を考慮。
- (8) 若手医師等研究者への助成の観点から40歳を目途に年齢を考慮。

などの点を踏まえ、5回の委員会における審議の結果、6名への助成を決定しました。

4. 令和7年度の海外派遣研究助成（採択順）

- 1) EACR 2025 congress
(第31回欧州癌研究学会議 リスボン・ポルトガル) 1名 (示説)
- 2) 33rd international congress of the European Association for Endoscopic Surgery
(第33回欧州内視鏡外科学会総会 ベオグラード・セルビア) 1名 (口演)
- 3) American Association of Cancer Research, Annual Meeting 2025
(2025 米国癌学会 シカゴ・アメリカ) 1名 (示説)
- 4) United European Gastroenterology Week (UEGW week2025)
(欧州消化器病週間 2025 ベルリン・ドイツ) 1名 (口演)
- 5) European Society for Medical Oncology Congress (ESMO 2025)
(欧州臨床腫瘍学会 2025 ベルリン・ドイツ) 1名 (示説)
- 6) The 67th ASH Annual Meeting
(第67回アメリカ血液学会年次総会 オーランド・アメリカ) 1名 (示説)

5. 海外派遣研究助成の成果

本事業は、当財団の公益事業にご賛同いただいた一般の方々からのご寄付を財源に実施させていただいております。本年度も6名の若手研究者による海外での研究発表を支援できましたのも、皆様のご寄付、ご支援の賜物と深く感謝をしております。

海外の学術集會に参加し研究成果を発表することは、これから指導者たるべき若手の医学研究者等が、自らのがん研究の方向性を確認し、世界の動向を肌で感じる貴重な機会を与えます。そこで各人が何を感じ、何を得たのか。その一端は、助成対象者が帰国後1ヶ月以内に当財団に提出することになっている研究成果報告書や、その他参考となる資料に見ることが出来ます。これらの報告書等は財団ホームページに掲載させていただきました。若き有為の医学研究者が得たものを、がん研究者間で、また本事業に寄付を頂いた方々と研究者との間で分かち合うことができればと考えた次第です。ぜひ、ホームページにご来訪いただき、皆様のご支援の成果をご確認いただきますようお願い申し上げます。

令和7年度 海外派遣研究助成金受賞者

	氏名	所属	渡航目的	開催地
1	黒川 良顕	国立がん研究センター研究所	EACR 2025 congress (第31回欧州癌研究学会議)	リスボン (ポルトガル)
2	林 憲吾	金沢大学附属病院	33rd international congress of the European Association for Endoscopic Surgery (第33回欧州内視鏡外科学会総会)	ベオグラード (セルビア)
3	今井 亨	国立がん研究センター中央病院	American Association of Cancer Research, Annual Meeting 2025 (2025 米国癌学会)	シカゴ (アメリカ)
4	石橋 一樹	広島大学大学院医系科学研究科	United European Gastroenterology Week (UEGW week2025) (欧州消化器病週間 2025)	ベルリン (ドイツ)
5	石川 史織	東北大学大学院医学系研究科	European Society for Medical Oncology Congress (ESMO 2025) (欧州臨床腫瘍学会 2025)	ベルリン (ドイツ)
6	長谷河昌孝	国立がん研究センター研究所	The 67th ASH Annual Meeting (第67回アメリカ血液学会年次総会)	オーランド (アメリカ)

黒川 良顕

● 国立がん研究センター研究所

派遣先／渡航期間

European Association for Cancer Research 2025 congress
(第31回欧州癌研究学会議) (リスボン、ポルトガル) / 2025.6.15 ~ 6.20

研究内容

尿路上皮がんのうち5-10%程度を占める上部尿路上皮がんに関して、122症例の全ゲノムシーケンス解析を行い結果について報告しました。これまでのエクソン解析では未知であった非コーディング領域に集積する特徴的な単一塩基置換や、がんの進展・複雑性に寄与していると考えられる染色体外DNAによるドライバー遺伝子の増幅と発現の増加が起きていることを認めました。染色体外DNAは本学会の中で最もホットなテーマの1つでもあり、同分野の第一人者に質問する機会をいただき、今後の研究における大きな刺激となりました。

林 憲吾

● 金沢大学附属病院

派遣先／渡航期間

33rd International Congress of the European Association for Endoscopic Surgery 2025
(第33回欧州内視鏡外科学会) (ベオグラード、セルビア) / 2025.6.16 ~ 6.21

研究内容

右側結腸癌に対するComplete Mesocolic Excision(CME)の有効性を検証するため、トリノ大学と共同でシステマティックレビュー・メタアナリシスを施行した。結果、CMEは3年DFS・OS、再発率、入院期間で有意に優れていた一方、血管損傷リスクと手術時間延長が課題であり、ステージIIIのみに生存率向上効果が認められるという、興味深い結果であった。本成果をThe European Association for Endoscopic Surgery (EAES) 2025で発表し、欧州外科医との学術交流を通じて研究の臨床的意義を確認した。

今井 亨

● 国立がん研究センター 中央病院

派遣先／渡航期間

American Association of Cancer Research, Annual Meeting 2025
(2025 米国癌学会) (シカゴ、アメリカ) / 2025.4.25 ~ 4.30

研究内容

2025年4月のAACR年次総会にて、卵巣明細胞癌(OCCC)におけるTROP2発現と免疫環境の解析結果を報告しました。125例の検討から、TROP2陽性率72.0%を確認し、PD-L1高発現や間質炎症が予後不良に関与する可能性を示しました。これによりTROP2-ADCと免疫療法の併用という新たな治療戦略の方向性が得られ、会場でも各国の研究者と活発な議論を交わしました。今後は本知見に基づき、医師主導治験の計画・実施を進め、難治性であるOCCCの治療開発を加速させる所存です。多大なるご支援に心より感謝申し上げます。

石橋 一樹

● 広島大学大学院医系科学研究科

派遣先／渡航期間

United European Gastroenterology Week 2025
(欧州消化器病週間2025) (ベルリン、ドイツ) / 2025.10.3 ~ 10.8

研究内容

大腸癌発生における遺伝子変異と炎症の関係に関する研究成果を発表した。APCおよびKRAS変異を有するマウスモデルに一過性のDSS誘導炎症を付加することで腫瘍形成が著明に促進されることを報告し、短期間の炎症刺激でも発癌リスクが高まる可能性を示した。本学会を通じて、炎症・遺伝子変異・腸内環境という三者の連関を多角的に解析することの重要性を再認識した。本マウスモデルはAPC変異を起点とした大腸腫瘍を発生する有用なマウスモデルであり今後は空間的・時間的解析を組み合わせた研究へ発展させたいと考えている。

石川 史織

● 東北大学大学院医学系研究科

派遣先／渡航期間

European Society for Medical Oncology Congress (ESMO 2025)
(欧州臨床腫瘍学会 2025) (ベルリン、ドイツ) / 2025.10.16 ~ 10.22

研究内容

BRAF V600E 変異を有する大腸癌に対する分子標的治療として、エンコラフェニブとセツキシマブの2剤併用療法およびビニメチニブを加えた3剤併用療法に関する研究について、ESMO 2025においてポスター発表を行いました。本研究では、がんゲノム情報管理センターのデータベースを用いた解析により、*TP53* gain of function 変異を有する患者において3剤併用療法が有用である可能性が示唆されました。国際学会での発表およびディスカッションを通じて、研究成果を国際的に発信する貴重な機会となりました。

長谷河 昌孝

● 国立がん研究センター 研究所

派遣先／渡航期間

The 67th ASH Annual Meeting
(第67回アメリカ血液学会年次総会) (オーランド、アメリカ) / 2025.12.5 ~ 12.11

研究内容

小児骨髄異形成症候群(MDS)は極めて希少な疾患であり、成人MDSと比較してゲノム異常の解明が遅れている。本研究では、国内の小児MDS症例を対象に、形態学的評価およびターゲットパネルシーケンスによる解析を実施する。小児MDSに特徴的なドライバー変異や病的生殖細胞系列変異を同定し、分子遺伝学的病態を明らかにするとともに、ゲノム異常と臨床的特徴の関連を明らかにする。

事業実績

2000～2025

■ I. がん情報提供支援事業

- 患者本位の「がん治験情報サイト」

■ II. 若手研究者の育成事業

- トランスレーショナル・リサーチ (TR) 研究奨励助成

■ III. 研究助成事業

- がん研究助成金 I
- がん研究助成金 II

■ IV. 海外派遣・招へい研究助成事業

- 海外派遣研究助成

■ V. 技術者研修助成事業

- 看護師・薬剤師・技師等海外研修者への助成

■ VI. 研究成果等普及啓発事業

- 国際がん研究シンポジウムの開催
- がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーの開催

■ VII. 広報活動事業

I. がん情報提供支援事業

■ 患者本位の「がん治験情報サイト」

患者さんやそのご家族が信頼できる最新のがん情報が検索でき、利用しやすいシステムとして製薬企業の協力により開設。

(詳細は「がん情報提供支援事業運営委員会報告」を参照)

2021.10. 1 非小細胞肺癌 公開

2022. 7. 1 血液がん 公開

2023. 1. 1 乳がん・子宮頸がん 公開

公開情報からの検索システム構築

2023.10.23 全12領域の企業治験情報（総ID数約500件）の登録

医療機関別治験情報公開

2024. 1.22 小児及びAYA世代のがん、希少がん、原発不明がん、

支持療法や緩和ケアの治験情報公開

2024 6.10 小児AYAの医師主導・特定臨床研究公表

2024 9. 3 サイト名称の改定、サイトレイアウトの全面更新

2024.10.25 フリーワード検索機能の実装

2025 5.14 厚労省HPに当サイトが掲載



II. 若手研究者の育成事業

■ トランスレーショナル・リサーチ (TR) 研究奨励助成

がん研究の第一線で活躍する研究者の指導を受け、研究の成果を臨床につなぐトランスレーショナル・リサーチの若手研究者を育成することを目的に、研究奨励助成金を交付。

年度	医学	歯学	理学	薬学	農学	その他	計
2022	2			1	2		5
2023	1		1	1			3
2024	3			1			4

Ⅲ. 研究助成事業

■ がん研究助成

わが国のがん研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究に対して、昭和43年、当財団創設以来毎年研究助成金を交付。

がん研究助成は、財団に寄せられた一般の方々からの貴重な浄財を以て実施している事業であり、国の各種研究助成金や各種財団の研究助成金とは一線を画する。

令和7年度（2025年度）から基礎・臨床研究分野の「がん研究助成金Ⅰ」と実務型研究分野の「がん研究助成金Ⅱ」に変更。

● がん研究助成金実績

【がん研究助成金Ⅰ（がん研究助成金 A 課題とTR研究推奨助成金が統合）】

昭和43年度から毎年助成しており、交付者数は平成29年度までに1,000名を超える実績となっているため、以下の実績を抜粋して掲載する。

がん研究助成金交付実績(2015(H27)～2024(R6)年の10年間)

年度 (回)	2016 (49)	2017 (50)	2018 (51)	2019 (52)	2020 (53)	2021 (54)	2022 (55)	2023 (56)	2024 (57)	2025 ※ (58)
交付件数	23	28	32	30	29	30	27	25	25	20

※2025年～がん研究助成金Ⅰ

■ がんサバイバーシップ研究助成

【がん研究助成金Ⅱ（がんサバイバーシップ研究助成(C課題)とがん研究助成金(B課題)が統合)】

2014(H26)年からの「がん研究10か年戦略」に基づく「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築」を目指した研究課題に関する研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究課題に対し、指定寄付事業として研究助成金を交付。

年度	医学	歯学	理学	薬学	看護学	その他	計
2015(H27)	2				3	11	16
2016(H28)	4	1			1	3	9
2017(H29)	5				1	5	11
2018(H30)	5	1	1		1	2	10
2019(R1)	4		2		2	2	10
2020(R2)	7				1	2	10
※2021(R3)		1	1		2	1	5
※2022(R4)	1	1			1	2	5
※2023(R5)		2			1	1	4
※2024(R6)	3		2				5
※2025(R7)	3		2				5

※令和3年度から研究助成金の募集はがん研究助成金に統合。

IV. 海外派遣・招へい研究助成事業

■ 海外派遣研究助成

がんを専門分野とする医師および研究者が行う海外での研究の発表・協議、施設調査、研究資料の収集などの先進的な研究活動に対して、旅費等の助成金交付。

(過去7年の実績)

年度	派遣者数
2019 (R1)	16
2020 (R2)	新型コロナウイルス感染拡大のため中止
2021 (R3)	
2022 (R4)	0
2023 (R5)	8
2024 (R6)	10
2025 (R7)	6

V. 技術者研修助成事業

■ 看護師・薬剤師・技師等海外研修者への助成

がんを専門分野とする看護師・薬剤師・放射線技師等のメディカルスタッフに対し、海外での先進的な研修に対して旅費等の助成金を交付。

年度	看護	放射線	臨床検査	薬剤	SW	理学・作業療法士	言語聴覚士	計
2000～2003 (H12～H15)	28	11	8	10	0	0		57
2004～2013 (H16～H25)	38	52	5	37	1	3		136
2014 (H26)	2	5	0	1	0	1		9
2015 (H27)	4	2	1	1	0	1		9
2016 (H28)	0	6	0	2	0	1		9
2017 (H29)	2	5	0	1	0	2		10
2018 (H30)	3	6	0	0	0	1		10
2019 (R1)	2	4	0	1	0	0		7
2020 (R2), 2021 (R3)	新型コロナウイルス感染拡大のため中止							
2022 (R4)	0							
2023 (R5)		1					1	2
2024 (R6)		1		1		1		3

VI. 研究成果等普及啓発事業

■ がん研究シンポジウムの開催

年度	テーマ
2004～2013	胃がんの基礎と臨床－最近の進歩－
	前立腺がんをめぐる課題と挑戦
	感染、がんと予防
	がん根治手術後の生理学的変化と QOL
	最近の放射線腫瘍学：技術の進歩と臨床導入への研究
	頭頸部・食道がんの基礎と臨床－最近の進歩－
	科学の発展を乳癌治療へ～新たなる挑戦～
	悪性脳腫瘍～現状と展望～
	放射線とがん
	世界のがん研究は今～次期対がん戦略に向けた課題～
2014～2018	希少がん：望ましい医療・研究体制を探る
	難治がん克服に向けた最新の治療戦略
	次世代免疫療法・ゲノム医療
	小児および AYA がん
2019・2020	新型コロナウイルス感染拡大のため中止
2021	全ゲノム解析が変革するがん研究・がん医療
2022	WGS, Long-read and Beyond
2023	次世代の抗がん剤開発
2024	がんRNA標的創薬の展望
2025	ゲノム情報が生み出す新しいがんの予防と医療

※ 2021 年以降は会場とオンラインのハイブリッド開催

■ がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーの開催

「がんサバイバーシップ研究助成金」交付者の研究成果報告と、がんサバイバーシップに関する正しい知識の普及を目的としたセミナーの開催。

年度	テーマ
2016	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーシップ研究の射程と国内外の展開
2017	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：今日からできるセルフケア
2018	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：親の私のがんになったとき～知りたい！子どもサポート
2019	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：ケア提供者としてがんサバイバーを支えるということ
2020	がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告（オンライン開催） ※セミナーは新型コロナウイルス感染拡大のため中止。
2021	がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告（オンライン開催） ※セミナーは新型コロナウイルス感染拡大のため中止。
2022	第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 がんサバイバーシップ研究助成金過去採択者の継続発展研究報告
2023	第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーの情報アクセス向上を目指して
2024	第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーが病い体験を社会に活かすとき
2025	第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーが地域で活用できる社会資源

※ 2022年以降は会場とオンラインのハイブリッド開催

Ⅶ. 広報活動事業

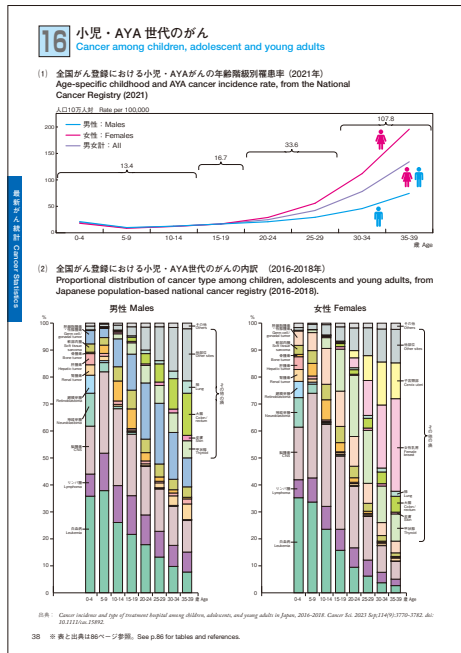
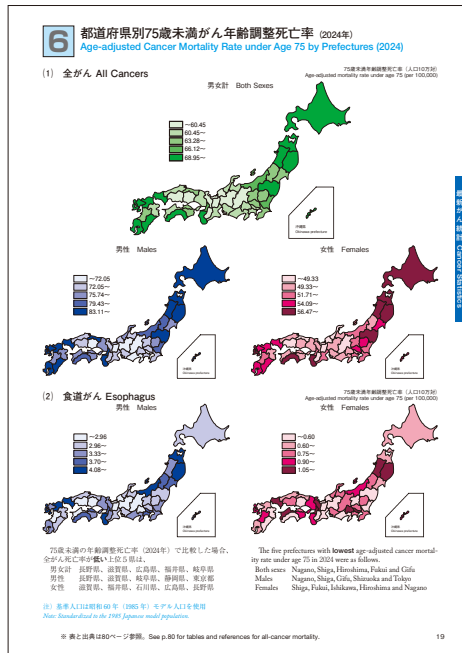
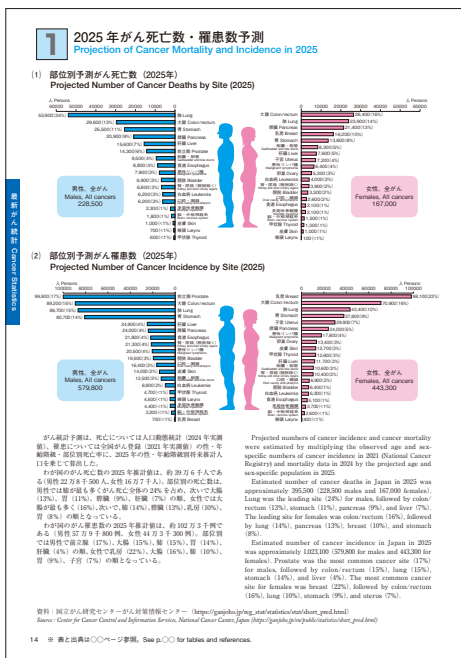
● 正しいがん知識の普及・がん研究者等への資料の提供

一般の方々にも理解できるがん研究に関する最新情報の提供及びがん予防の知識などを各自治体、がん診療連携拠点病院、研究機関等などのほか、全国の公立中学校にも広く情報提供。

(1) 広報活動

①がんの統計2026

本書は“わかりやすいがん統計本”として1974（昭和49）年から厚生労働省、国立がん研究センター、大阪国際がんセンター、弘前大学医学部附属病院、（公財）放射線影響研究所等の協力により、英訳を含めて編集した貴重な資料です。（年1回発行）



②がんを防ぐための12か条および12か条ハンドブック（全面改訂しました）



この冊子は、1978（昭和53）年から「がん予防の12箇条」としてがん予防のための生活改善情報を提供してきたものを、日本人を対象とした疫学調査などの科学的な研究で明らかにされた確かな証拠をもとに改訂を重ね、現在に至っています。

今回、最新の研究成果を取り入れ大きく改訂した2011年版出版後の研究の進展や社会情勢などに基づく小規模な改定を行い「がんを防ぐための12か条 ハンドブック Ver.3」としました。

「がんを防ぐための12か条」を

- 喫煙とがん
- 飲酒とがん
- 食事とがん
- 運動・体形とがん
- 感染とがん
- 検診・診療とがん
- 情報とがん

の7項目に分け、詳しく解説しました。

③「やさしいがんの知識」・「がん検診」・「がんと告知された小児・AYA世代の方がまず始めに手に取るパンフレット」（一般財団法人日本宝くじ協会の助成により作成）



④その他



(2) これまでの広報活動実績

年度	事業内容
2019	がんの統計
	やさしいがんの知識2019
	がん検診
	がん治療における口腔支持療法のための口腔乾燥症対応マニュアル
	多職種から学ぶ：がん看護の基礎（食事を支えるケア編）
2020	がんの統計
	がんを防ぐための新12か条ハンドブック
	やさしいがんの知識2020
	がん検診2020
	がん治療中の食事サポートブック2020
	がん治療前の食事のヒント改訂版
2021	がんの統計
	改訂版がん治療と食生活～栄養士・看護師・歯科医からのヒント
	やさしいがんの知識2021
	がん検診2021
	がんサバイバーのためのかんたんレシピ2022
2022	がんの統計
	やさしいがんの知識2022
	がん検診2022
	知っておきたい放射線治療 改訂版
	がん治療中の食事サポートブック2023
	がんと告知された小児・AYA世代の方がまず始めに手に取るパンフレット
2023	がんの統計
	やさしいがんの知識2023
	がん検診2023
	がんターミナル期をご自宅で過ごす方の生活と食事
2024	がんの統計
	やさしいがんの知識2024
	がん検診2024
	がんと告知された小児・AYA世代の方がまず始めに手に取るパンフレット2024
2025	がんの統計
	やさしいがんの知識2025
	がん検診2025
	がんと告知された小児・AYA世代の方がまず始めに手に取るパンフレット2025
	がんを防ぐための12か条ハンドブックVer.3
	がんを防ぐための12か条（リーフレット版）

令和8年度 事業計画

公益財団法人がん研究振興財団令和8年度事業計画を掲載しました。
本誌に掲載しております「令和7年度事業実績」と併せてご確認下さい。

公益財団法人がん研究振興財団

令和8年度事業計画

1. 研究助成事業

(1) がん研究助成

① がん研究助成金Ⅰ（基礎・臨床研究分野）

若手研究者が主体的に実施する、がんの本態解明を含む基礎研究からシーズの実用化に向けた応用研究、がん診療の現場における臨床研究、トランスレーショナル研究に至るまでの幅広い研究分野に助成する。

② がん研究助成金Ⅱ（実務型研究分野）

がんサバイバーの療育支援をはじめ、日常生活の療養上の具体的な問題解決を目的とした研究課題に助成する。

(2) 海外派遣研究助成

国際的視点からがん医療・研究の向上ならびに人材の育成を図ることを目的に、若手研究者が行う海外での研究成果の発表、研究に関する協議などに必要な助成を行う。

2. 関係団体助成事業

UICC（国際対がん連合）の事業に対して協力助成を行い、世界、アジア等のがん対策に貢献する。

3. がん情報提供支援事業

がん患者や家族にとって利用し易く信頼性の高い、最新の企業治験情報等を分かりやすく提供するため、「患者本位のがん治験情報サイト」を令和3年10月から開設・運営している。

新規取得治験情報を定期的に公開しながら引き続き運用するとともに、より利用しやすい検索画面への改修などサイト機能の充実を図っていく。

4. がん研究シンポジウム等の開催

がん研究シンポジウム及びがんサバイバーシップセミナーとして最先端のがん研究動向の講演や、がんサバイバー支援のための最新の知見等を紹介するためのセミナーを開催することによりがん研究等の普及啓発を行う。

5. 出版・広報活動事業

がんに関する統計、がん関連の各種パンフレット、財団機関誌の作成・配布により、がん研究や予防に関する情報発信を行う。

2020年8月に作成した「がんを防ぐための新12か条」(ハンドブック及びパンフレット)については、最新のがん予防に係る情報を反映した改訂版を発行する。

ご寄付 芳名録

令和7年度におきましても、多くの方々からご寄付をいただき、誠に有難うございました。ここにご芳名をご披露させていただきます。

これらのご寄付は、がんで亡くなられた方のご遺志を活かすために寄せられたもの、がんと闘ったことのあるご本人から寄せられたもの、そして、その他一日も早くがんの克服されることを願う方々から寄せられたものです。

当財団と致しましては、貴重なご芳志にお報いするため、がん克服を目指す研究や診療の進歩に有効に活用させていただきますことをお誓いして、お礼に代えさせていただきます。

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 堀田 知光

令和7年度（令和7年4月1日～令和8年3月31日）

住 所	氏 名
東京都	積 田 孝 一 様
広島県	野 中 俊 志 様
兵庫県	金 澤 眞由美 様
兵庫県	池 田 恢 様
東京都	一般社団法人 生命保険協会 様

（ご承諾を頂いた方のみ受付順に掲載しています）
他 総件数 30件

ご寄付に添えられたお言葉の一部を
紹介させていただきます。

- 沢山の方からのお気持ちが集まったものです何卒宜しくお願い致します。

～ご厚志ありがとうございました～

ご寄付についてのお問い合わせ先

お問い合わせは下記までお願い致します。ご寄付の申し込みを希望される方には寄付申込書、銀行及び郵便局の振込用紙（払込手数料は不要）、特定公益増進法人であることの証明書（寄付金控除等の税法上の特典が受けられる）等の関係資料をお送りさせていただきます。

〒104-0031

東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階

公益財団法人 がん研究振興財団

TEL 03(6228)7297 FAX 03(6228)7298

E-mail : info@fpcr.or.jp

ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/contribution.html>

公益財団法人がん研究振興財団 役員

令和8年4月1日

会 長	垣添 忠生	(公益財団法人日本対がん協会 会長)
理 事 長	堀田 知光	(国立研究開発法人国立がん研究センター 名誉総長)
専務理事	石塚 正敏	(公益財団法人がん研究振興財団 専務理事)
理 事	上田 龍三	(名古屋大学 特任教授)
同	佐野 武	(公益財団法人がん研究会 がん研有明病院 病院長)
同	関谷 剛男	(元国立がんセンター研究所 部長)
同	田中 利彦	(田中綜合法律事務所 代表弁護士)
同	中釜 齊	(国立研究開発法人日本医療研究開発機構 理事長)
同	村上 善則	(日本医科大学先端医学研究所 特命教授／東京大学 名誉教授)
監 事	亀口 政史	(亀口公認会計士事務所 所長)
顧 問	荒蒔 康一郎	(公益財団法人がん研究振興財団 前会長)

公益財団法人がん研究振興財団 評議員

令和8年4月1日

評 議 員	木村 政之	(一般社団法人偽造医薬品等情報センター 代表理事)
同	久保田 政一	(一般社団法人日本経済団体連合会 副会長・事務総長)
同	坂元 亨宇	(国際医療福祉大学 医学部長／慶應義塾大学 名誉教授)
同	澁谷 正史	(上武大学 学長)
同	菅野 純夫	(一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事／ 東京大学 名誉教授)
同	津金 昌一郎	(国際医療福祉大学大学院 教授)
同	野田 哲生	(公益財団法人がん研究会 がん研究所 名誉所長)

あどがき

本年もここに機関誌「加仁」をお届けできますことを、関係各位のご支援とご協力の賜物として、心より御礼申し上げます。本誌は、1969年の創刊以来、長きにわたり当財団の活動の歩みを記録し、社会に向けてその成果をお伝えしてまいりました。これまで継続して刊行を重ねてこられたことは、当財団にとって大きな財産になっていると考えます。

第53号からは、こうした歴史を踏まえつつ、本誌の発行形態を見直し、従来の製本による刊行を終了し、PDFによる配信のみといたしました。情報の受け取り方や保存・共有の方法が大きく変化する中で、より迅速で利便性の高い形で本誌をお届けすることを重視したものです。ご理解いただければ幸いです。

本号では、巻頭言として、国立がん研究センターがん対策研究所長の松岡豊先生から「データと共創で拓くがん対策」をご寄稿いただきました。がんに係る各位の情報提供について「情報を受け取る個別性に配慮し、共創を通じてニーズを発見し、対話と伴走でがん予防・医療・共生における意思決定を支え、誰もがアクセスできる形で提供する、そのための挑戦が求められています」との言は、当財団が情報発信を行っていく際に常に肝に銘じておくべきお言葉と考えます。

また、当財団が2025年度に実施したシンポジウムやセミナーの開催状況、研究費助成の実績など、今年度の主要な事業についてご報告しております。がんに係る研究支援や最新の知見の普及啓発、がん治験情報の分かりやすい提供などの公益事業を、多くの皆様のお力添えをいただきながら進めることができました。その成果と積み重ねをご覧いただければと存じます。

トピックスでは、厚生労働省から公表された「がん登録等の推進に関する法律」に基づく全国がん登録による5年生存率について紹介しています。全国一律の制度に基づき作成されたがん統計は、がん対策の基礎資料としての継続性、地域比較可能性などの点から大きな意義があると整理できます。

今後とも、当財団は研究支援と情報発信の両面から、がん克服に寄与できるよう努めてまいります。機関誌「加仁」が、その活動をご理解いただく一助となれば幸いです。引き続き、皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

(Y・K)

か仁

第53号 2026

令和8年4月発行

編集

代表 堀田 知光

発行

公益財団法人 がん研究振興財団

〒104-0031

東京都中央区京橋2-8-8

新京橋ビル5階

TEL 03(6228)7297

FAX 03(6228)7298

ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/>

全国がんセンター協議会加盟施設一覧

(2025年7月4日現在)

北海道がんセンター	〒003-0804 札幌市白石区菊水4条 2-3-54	☎(011)811-9111
青森県立中央病院	〒030-8553 青森市東造道 2-1-1	☎(017)726-8111
岩手県立中央病院	〒020-0066 盛岡市上田 1-4-1	☎(019)653-1151
宮城県立がんセンター	〒981-1293 名取市愛島塩手字野田山 47-1	☎(022)384-3151
山形県立中央病院	〒990-2292 山形市大字青柳 1800	☎(023)685-2626
茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター	〒309-1793 笠間市鯉淵 6528	☎(0296)77-1121
栃木県立がんセンター	〒320-0834 宇都宮市陽南 4-9-13	☎(028)658-5151
群馬県立がんセンター	〒373-8550 太田市高林西町 617-1	☎(0276)38-0771
埼玉県立がんセンター	〒362-0806 北足立郡伊奈町小室 780	☎(048)722-1111
国立がん研究センター東病院	〒277-8577 柏市柏の葉 6-5-1	☎(04)7133-1111
千葉県がんセンター	〒260-8717 千葉市中央区仁戸名町 666-2	☎(043)264-5431
国立がん研究センター中央病院	〒104-0045 中央区築地 5-1-1	☎(03)3542-2511
がん研究会有明病院	〒135-8550 江東区有明 3-8-31	☎(03)3520-0111
がん・感染症センター 東京都立駒込病院	〒113-8677 文京区本駒込 3-18-22	☎(03)3823-2101
神奈川県立がんセンター	〒241-8515 横浜市旭区中尾 2-3-2	☎(045)520-2222
新潟県立がんセンター新潟病院	〒951-8566 新潟市中央区川岸町 2-15-3	☎(025)266-5111
富山県立中央病院	〒930-8550 富山市西長江 2-2-78	☎(076)424-1531
石川県立中央病院	〒920-8530 金沢市鞍月東 2-1	☎(076)237-8211
福井県立病院	〒910-8526 福井市四ツ井 2-8-1	☎(0776)54-5151
静岡県立静岡がんセンター	〒411-8777 駿東郡長泉町下長窪 1007	☎(055)989-5222
愛知県がんセンター	〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿 1-1	☎(052)762-6111
名古屋医療センター	〒460-0001 名古屋市中区三の丸 4-1-1	☎(052)951-1111
滋賀県立総合病院	〒524-8524 守山市守山 5-4-30	☎(077)582-5031
大阪医療センター	〒540-0006 大阪市中央区法円坂 2-1-14	☎(06)6942-1331
大阪国際がんセンター	〒541-8567 大阪市中央区大手前 3-1-69	☎(06)6945-1181
兵庫県立がんセンター	〒673-8558 明石市北王子町 13-70	☎(078)929-1151
呉医療センター・中国がんセンター	〒737-0023 呉市青山町 3-1	☎(0823)22-3111
山口県立総合医療センター	〒747-8511 防府市大字大崎 10077	☎(0835)22-4411
四国がんセンター	〒791-0280 松山市南梅本町甲 160	☎(089)999-1111
九州がんセンター	〒811-1395 福岡市南区野多目 3-1-1	☎(092)541-3231
大分県立病院	〒870-8511 大分市豊饒2-8-1	☎(097)546-7111

※全国がんセンター協議会HPより

全国がんセンター協議会に属しているこれらの施設は、がんの専門医を多数擁して、がんの診断と治療に積極的に取り組んでいます。

当財団の事業活動の多くは、皆様からの尊いご寄付により
支えられています。
皆様のご理解とご支援ご協力をお願い申し上げます。

がんを防ぐための12か条

あなたのライフスタイルをチェック
そして今日からチェンジ!!



- 1 条 たばこは吸わない

- 2 条 他人のたばこの煙を避ける

- 3 条 お酒は控える

- 4 条 バランスのとれた食生活を

- 5 条 塩辛い食品は控えめに

- 6 条 野菜や果物は不足にならないように

- 7 条 適度に運動

- 8 条 適切な体重維持

- 9 条 ウイルスや細菌の感染予防と治療

- 10 条 定期的ながん検診を

- 11 条 身体の異常に気がいたら、すぐに受診を

- 12 条 正しいがん情報でがんを知ることから

発行 公益財団法人 がん研究振興財団
〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階
TEL 03 (6228) 7297
FAX 03 (6228) 7298
E-mail: info@fpcr.or.jp
ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/>